

燈

火

創

刊

号

昭5年1月(高2)



# 炫火

創刊號

あかときと鳥も鳴くなり  
寺寺の鐘もとよみぬ  
明けいでぬこの夜（歌經標式）  
うつくしき小目の笹葉に  
霞ふり霜ふるとも  
な枯れそぬ小目の笹葉（捲磨風土記）

## 「炫火」發刊の辭

魂は直感を喜ぶ。孤獨なる味はまごころの現れである。心性の境涯に生命を燃焼せよ。理智の炬火もつひに消ゆべし。こゝに生命の純なる嘆美を感じよ。それは詩の世界である。短歌の文字塔である。われらは新鮮である。人間納る内的生活を欣求する。すさびもよい。頼座もよい。しかもわれらは窮極に於て芭蕉のいふ道草に餓する慨をもつ。すでにそれは絶体境である。

藝文は轉換したといふ。それは古史放棄の絶叫ではない。新しい文藝は古典の表現の上にたつべし。それは藝文の辨証法である。

短歌は吟嘆の藝術である。さけびの抽象である。真に酔子として酔なる境涯である。象徴の極消盡悠久なる東洋的神祕の不滅の韻律を讃仰せよ。そこに純粹藝術を思はぬはいつはりである。げに緻くして長久なるものこそわが短歌である。

極めて新しさものかさなく古きもののみが慰めうる不幸なる浪漫精神をもつ夜僅諸子、來りてわれらがつどひを飾れ。



方尊寺など

湯原冬美

○山のきり町にのりくるゆうぐれはまるめらの皮むきにけるかも  
たそがれて爰珠沙華土手に光りおり暗緑の玉子食しつゝあれば  
こゝにして海彼の文を見つゝあり峽の下より時雨降りくる  
萬兩の赤きはすざてうらかなししぐれの雨にぬれにけるかも  
あふらびのあかさどぼしみこゝにみる海彼の文はいたくふりけり  
あふれでる湯ぶねの中につかりつゝしづけさ思へばしぐれ過ぎゆく  
かそやかに山茶花のはなにほひくるあかつきやみは静かなるかも  
あかどきとなる時ならむむがしのまがきの上みしるき霧たつ

あかつきのほのかの暗は南天の小さき實にあけそめにけり  
○ねつかれぬ旅寝の夜はいくたびも足のおきばをかえにけるかも  
みきだなす石廻廊に人あらず上りつめたる寒さのうごき  
がらす戸はさぶさにひびき向つ屋に金屋しりふり止りゐるかも

田中克巳に

ながさきは聖まりあのはらいそに天昇りけむをみなかなしも  
はてしなき道ゆくひるはうつせみにいきの生命をかなしみけらざるや

松下武雄に

ほこ杉のほささに高さ一つ星幽けく光るは消えざらむかも

陵 樹

田中克巳

○ 雲根火やま山を低みて頂に社立てるが明らかに見ゆ  
鐘杉の立ちはずけし道の邊の安寧陵をおろがみまつる  
○ 淡紅色の山茶花屋根におちたまり屋根の傾斜を滑らずにゐる  
ひさかたの天の香具山落葉せる林の彼方に見えて低しも  
陵の茂樹のひまゆ濠の水かぐろに光り波立てる見ゆ  
劔のみ池の水にかいつぶり一つゐると見れば又一つゐる  
かいつぶり池に浮かぬて水潜き遊べるなれどその場動かず  
みはかせの劔の池の水へだて光れる生駒寒しとぞ思ふ  
さみしうと云はゞ過ぐべし白々と倉橋山に雪つめる見ゆ

雪置ける山の空には元日の日子あたゝかく照りぬたりけり  
ひようくくと風のあがれる空の色和みきはまりたふときものか  
ひようくと風はあがれり大空の澄みのとほりにその色しるし  
細き路まがりうねりて檜隈の大内陵に登るなりけり  
日翳りて風いで来るさうくと陵樹とよみて鴉籠ぶなり  
陵の枯高松に鳥ゐて一度とび立ちまたとまりけり  
陵にのぼる坂道のぼりぬて鳥とべるを同じ高さに見き  
みかんなれる丘を越ゆれば文武陵茂木はろばち見えそめにけり  
湯原冬美に答へて (二首)  
ながさは南蠻寺の鐘のころ戀かたりけむをみなかなしも



しみじみといのちかなしみ夜ふかくかせさむきみちたどるなりけり  
昨夜ふりにけらしもいこまやま斜面はだらに雪ふれる見ゆ (班雪)  
大空と地をかぎれる雪の線一寸おにしてしみじみ白し  
畑葱の秀立ち鋭けれやしろがねの雪の大野に青條つくる  
雞の聲のかきけき朝にして白水仙花開きたりけり (冬日かげ)  
吾等らと焚火もしつ、水仙の一つ花咲ける寒しと見たり  
新田子のな、うに封せる水仙の一つ花の色はさむざむしもよ  
野の上をつぐみむれ穂びわたるとき高壓線をよぎりたりけり  
高壓線の電柱のつらなりはるけくて野のはたてにも認めずあるなり  
冬野には藁場ありて多ければ遠くものは霧りにありけり



大高短歌会詠草 (昭和四年十二月六日) (高2)

一、いとまきは立つ木 稀なる 笹原にくめきのあち葉こ、たぐ散れり、  
二、兄とていさかいて来レ 帰るさのめかすみ路に人形と拾ふ、

三、過きしこと悲しく思はる 秋の夜にちが衣ぬふ母老へ見ゆ、  
四、いとまきは雲のさ小まに大をらの見ゆ、 中たけまひかりしみ居たりけり

五、二十にてわかれのよのいかりレリ、この大いなるいかりいかにすべまや  
六、はつち中のえらのなごみのさ中、<sup>田中鳥</sup>一つ出て 視野をよこきわり

七、宵闇の空にほのけく煙突のくろき煙がたなびきて居り  
八、夕ぐれにせ面鳥はほうほうと昔枯るる野と羽根ひろけたり

九、吹く風は悩こわつつ巷行く美しき女の日午ゆる、も、

十、日のひかりあまわさ道のしろ光くもの、こつ見えでさえたり、  
十一、はんの木の前にありて百舌なきめくまなまはいて道細りけり

十二、ますらものたえてあらむとあほぶたる、<sup>山</sup>に雲切月照りにけり  
十三、ゆくりなくひとめ見たるを、<sup>山</sup>と見えず、降りゆきにけり、

十四、商人になつた旧友と生徒我は、<sup>山</sup>はづます向ひあにけり  
十五、君は吾を吾は君をば如何と見んしはし、<sup>山</sup>別水で過き来し心

十六、ゆくりなく心とまればはいたこ、ろしほしもり、<sup>山</sup>やみこえしか  
十七、静かなるおもひの中に大いなるいかり、<sup>山</sup>めめてわかれづくにゆくか、

十八、われは只そちの心に任せてと云へ、<sup>山</sup>めか母すかた淋しも  
十九、日影照る秋の紅葉の静けさは杉の向人通ららし

二十、みちばたの閑木を屋上の酒のうま、<sup>山</sup>くしげに冬の夜寒  
二十一、夕づよし信太の原の気をやみ馳けゆく友らあまやけく見つ

二十二、上待身をすべり落さあらはなむ、<sup>山</sup>腰のあたりに朝の気ながる  
二十三、居合はこめ人のこぼるをま、<sup>山</sup>くにまひるはれみみで舞ひた、

二十四、こにおて心うれしも枯草の原一杯に冬の陽の照り  
二十五、ハットバットを思ひ切りふがす、<sup>山</sup>騒がしき隣りの部屋に心いもどほり、

二十六、枝うつり山の小鳥はくちとなく冬陽静けき、<sup>山</sup>雑木林に

4, 3, 1, 2, 3, 2, 1, 2, 3, 1, 6, 4, 5, 1, 3, 1, 2, 1, 1

奥野



炫火

第一号

昭5年2月(高2)



# 人情

第二号

冬過ぎて春し來れば年月は新なれども  
人は舊りゆく  
天地と共に久しく住まはむと思ひてあ  
らし家の庭はも  
おくれぬて吾はこゝにむはるがすみだ  
なびく山を君がこゝにむはるがすみだ  
み越路の雪ぶる山をこゝにむはるがすみだ  
る我をかけてしぬばせ  
わが背子を大和へやるとさ夜更けて曉  
つゆにわが立ちぬれし  
× 丈夫の行くとふ道そ凡うかに念ひて行  
くな丈夫のとも

(萬葉集)

昭和五年二月



炫火梯二號目次

春宵・春雨  
 近 仙・雪山  
 や 伊見時原  
 紀 伊見時  
 おん母その他  
 生 活断誦  
 感傷並びに序  
 京都に遊ぶ  
 朝 嶺  
 道 嶺  
 雜 詠  
 近 詠  
 ふ るさ  
 近 詠  
 編 輯 後 記

佐々木青葉村  
 衣笠紅梅  
 丘 三 三  
 丸 三  
 津 田  
 嶺 岡 歌 太  
 詠 原 冬 二  
 湯 川 英 夫 美  
 西 川 英 夫 美  
 大 東 沙 矢 吉 夫 美  
 曼 官 沙 矢 吉 夫 美  
 本 官 沙 矢 吉 夫 美  
 友 真 久 清 見 矢 吉 夫 美  
 友 真 久 清 見 矢 吉 夫 美  
 さ 真 久 清 見 矢 吉 夫 美  
 め 真 久 清 見 矢 吉 夫 美

御母その他

いたつきの床にいねたるわが耳に百舌鳥はきこゆれ姿見えずかよ  
 (百舌鳥三首)  
 百舌鳥のこゑ高くなりぬるわが庭の椽の木末に今かきぬらむ  
 やゝにして飛び去りにけむ百舌鳥のこゑはるかにきこえやがてやみ  
 つも

一日夢におん母を見る、別れたてまつりてより十幾年、おもかげは遠に

嶺岡歌太郎



うすし。覚めてのち悲しびにたえずして作れる歌五首

が あさんと呼へど願はずうしろかげ霧にかくれて行きたまふなり  
御母をもとめて行きしみちの隈白く咲けるは何の花をも  
道の辺に花さけりしが悲しけれ頭うなだれさだかには見ず  
葉がくりに白く咲きたる庭椿はばのみおもに似たりとぞ思ふ  
御母のみことさかざる幾年ごにはに咲けるは白玉つばき

友を訪ねて

久しぶりに歌をかたらむ久しぶりに御画ながめむとわれは来りし  
もみぢばの過ぎしかたらむと来たれども君遊あそ行してかへりまさぬに  
待つことしばしになりぬまたの日にこころのこして今はまからむ

同じ所にてと友の寫真を見る

むかしむかし君とかたりしことのははすべて忘れぬ君は忘れず  
人間のこころかなしく信濃の雪はいつかたえけむなみだながるも

感傷並びに序

湯原冬美

木下空太郎氏が譯した Rickard Mutter の十九世紀佛國繪画史を見  
た夜、それ故私は、ふるさとの春夜を思つたのである。今はなくなつ  
たあの桔槔きこの消えてゆく音を記憶の中に呼びさまして、いわなしの  
実の甘く酸いあはれさと、四月にさくすかえぼの花の真赤な色に涙  
を流す悲哀を感じた。ふるさとの春の日、くさつた土の匂と饑えた  
生命の直感される古い土蔵の中で私は英泉の華魁絵を愛しみ、ハルン  
アル・ラシットの幻想世界を夢みては南藍松のきた頃を慕かしむので



あつた。今この美しい藝術的な記述をながめつゝ、わたしはひっそりとしたうたひとかないみを思ふのである。その一

あめうをのしら眼のにぎりほかなしもよめる湯の中でおもひいるかも  
その二

宇陀びとのおくりし魚のあめうをのあからににぶれる眼を隔りみる  
その三

ゆく春は宇陀路の雪を語りけるかも川をひをか行きかく行きうたひは  
去らじ

最近の湯原冬美に興ふ

たわけたる歌作るゆえやうやうにその顔のほど細りけらげや

朝庭にほのぼのいきる生命思ひつ集つくる蜘蛛をながめぬるかも

こころこめ歌作りしもおろかなるむかしのことゝ思ふすべなき(自嘲)

晝に燃ゆる火

あまざらふひろの廣野に燃ゆる火の遠きあはくしてまがなれもよ

つゆじもは宵宵にまし啼きつどふ沼池の鳥は聲細りけり

ひひらぎのこわ葉のかわき見いりぬるたそがれ近くはさふしと思ふ

川をひの枯葉はおちて風さやがずひばはむれきぬつゆじもはおき

冬の日はゆうぐれごろのうらかなしつづらつづらに赤き南天

淡雪はときどきふりて消えゆけりひる過ぎてなほ氷とけずも

ひたぶらの闇の峡みちいでし時星眼のまへにありてかざやく  
(歌本をおもふ二首)

あゆ雪はぬれたる土にしみいりて落つまでもなく消ゆるさびしき

友なる鋭ニ湯原冬美を歌ふ、冬美之を聞きて即ち

和ふる歌 一首

君が見し深きお山のそうき木はうららの日にか燃え果てにける



# 編輯後記

創刊号発行直後に例会を開いて今後は月刊にしようといふことに決めたが今考へるとこれはやはり少し無理ではなかつたらうか

これは或は當つてゐないかもしれないが少くとも前から作つてあつた歌の多い、と思ふものとか、批評してほしいもの丈を抜くとかでなければと思ふ。とにかく僕は「焔火」によつて横濱自身を見せあふのだ。もう少しはんと自分のあらはした歌がほしい。(これは必

ずしも生活の歌を要求するのではない)この点で僕は丸君の歌に(多少の誇張のいや味はあつても)如実に彼を想はしめるものがあると思はれる。

×  
こんな所で云つちやいけないかも知れぬがあれほどサンチメンを排してゐた僕にその境地がむしろなくなつて来たのを奇しむ。これは湯原君の影響だと思つてゐる。

×  
歌論が欲しかつたのだけれど誰も持つて来てくれな

い。休みの間にでもしつかり勉強して歌(又は詩)の定義を下してくれたまへ。その人に僕は多大の尊敬と感謝を捧げやう。(湯原冬美)

×  
この怠惰なる編輯人は創刊号で示した元氣から思に頓落しかけてきた。しかし僕は嶺丘君とは及対に一月発刊が困難でなからうと思ふ。

×  
呈出歌の方は最速して欲しい。勿論われわれは作歌の気持を了解する故自選の標はしいことだとはよく知つてゐるが、たゞ諸子のま

ごころをのぞむのである。

×  
題号の「焔火」はさきに記しわすれたが大東君の採であることをわが歌会の記録のために記して置く。

×  
次から創作歌について編輯者の方で酌量する様にしたいと思ふが諸君いかがです?

×  
編輯後記で嶺丘君がサンチメン的傾向を懐のせいとしてゐるが「不幸なるロマ

の名称に復するかもしれない。しかし私らの如く「た

わけたる歌作るしてふ本ねをばくロマンチケルの感傷も、なほ短歌から脱着をた

ち得ぬ者の本心だ、その「すべなさ」を感ずる何人がわが同人のうちにもあるであらう。だからそこらの二三人の方はこの「すべなさ」感傷を愛しんでくれることと信ずるのである。私らにとつては作歌そのものがこの感傷のせいであらうと思ふ。だから僕は感傷をうたひ、うたわけたる歌作る自分を自嘲するのである。

×  
終りに附記するが僕らの

意向ではこの号を三年の方への送別の意味としたかつたのである。しかし丘君以外から歌をいただけなかつたのは遺憾であつた。たゞ我々は諸兄のまへに諸兄の培つていつた会からさつと秀れた一人二人があらはれるであらうことを確信を以て云へるだらうと思ふ。僕らにつねに眼をそ、いでくれる人々にわれわれが来るべき日に新なる現実へ突進する勇氣を保持しつゝあることを告げるのを愉快に思ふ。(湯原冬美)



炫

火

昭5年4月 (高)



# 火情

第三号

歸りける人來れりと言ひしかばほとほ  
 と馳にさ君かと思ひて  
 馬柵越し家食む駒のはつはつに新肌ふ  
 れし子ろしかなしも  
 小竹の葉はみ山もさやに堅げども我れ  
 は妹思ふ別れ來ぬれば  
 こま錦紐とけさけて寝るが上に何と爲  
 ろとかも奇に愛嬌しき  
 行けど行けど逢はぬ妹ゆえ久方の天の  
 露霜にぬれにけるかも  
 藤波の花はさかりになりにけり寧樂の  
 都を思はすや君

(萬葉集)

昭和五年四月



炫火第三號 目次

昭和五年四月發行

|           |                |
|-----------|----------------|
| 春陽光       | 大東猛吉 (一)       |
| 巨勢山その他    | 湯原冬美 (二)       |
| 春の風景      | 嶺丘取太郎 (五)      |
| さくやのな旅    | 鏡 二 (七)        |
| あしあと      | 西川 英 夫 (八)     |
| 鎌倉近郊の旅    | 桜 沙 影 (九)      |
| 三出山其他     | 澤 曼 沙 矢 (十一)   |
| 雑詠        | き み を (十三)     |
| 歌並に序      | 惠 田 春 (十四)     |
| 港町にて      | 津 田 清 (十七)     |
| 我新編空珠銘のこと | 湯 原 冬 美 (三〇)   |
| 野崎村慈眼寺    | 嶺 丘 取 太 郎 (三二) |
| 編輯後記      |                |

巨勢山 その他

湯原冬美

河の上のつらつら椿つらつらに見れどもあかぬ巨勢の春野は(葛葉)

巨勢山の上ゆく雲や下ゆくやまろびて見れば春ふけしともい

x

日かげりてあつさいささも替ししときわがあゆむまへとかけ走りの

(巨勢山口神社)

川の上のぞうまの山はくもりみて牛ひかれきて川渡りある(能登野川)

ふるさとを

あまのはら雲のかけりは光充ちるぬわがゐる候はすでに闇なり



杉の木のでし交らへる梢すざ動きゆく雲國中に光る  
重り雲の動き静かに光をちおりひつそりとして杉もるしずく

x

天つそら天つ高空ゆく風の動き変ればけぶり乱るゝが見ゆ(山越)

金屋に在石佛讃頌

みほとけの静かな顔にさす光ともしくなりて山を下りま

石佛いそくのむねのほとりのふくらみの尊たかとしと思ひぬ山下りつ、

春日地蔵谷石佛附近

くまさゝの一面に生ひし山の谷風ふきだせば雨ふりてきぬ

おのづからに生ひしげりたる山の相のしづけさ故に尊たかしと思ふ(奥山)

宮 籠

あまつの宮の籠の流、うづも名にひびける虚なり。屏風を立てたる

巖の肩よりさしのぞめば、底ひも知らぬ青淵の色、骨も冷ゆるは

かり覚ゆ。——上田秋成『岩橋の記』

つり橋を渡らうとまに大粒の雨にしづく落ちかゝりけり

たすの上の三船の山にゐる雲の雨ふるといふとまをたぬらむ

榮山寺

ひる過ぎてくもれる空とまりにけり阿田山あたり雲動く見ゆ

午とともに榮山寺道のほろては早雲を標はちりかゝりけり



春の風景

嶺 丘 取 太 郎

庭の樹のこずゑをわたる風のおとたえてきこゆ<sup>こ</sup>咽をおもふも  
 木斛<sup>もくこく</sup>とかしのおち葉をばさあつむときは木なれば葉のいろぞ濃き  
 かそ<sup>か</sup>かにいのち生きなむ倉屋根の棟につくなる吾の花のごと  
 枝先の夏みかんの実やねにゐてわれはもぐなり屋根より下  
 此のむらにはこれの高木の多くあるけふをはじめて屋根にのぼれり  
 下よりはやはらかに見ゆるかや屋根も萱の莖なれば足<sup>あし</sup>を傷<sup>や</sup>く  
 墓垣のぐみの木の実は熟れたれどひと採らずして地におつらむか  
 墓垣のぐみのあけみを手にとり<sup>れ</sup>食<sup>く</sup>ひは之食はず他<sup>た</sup>もさながらむ  
 わが家は何となけれどうつしみの心しづまり寝<sup>い</sup>のやすきところ  
 え々にかへれる家のわがへやにかはづを聞くも春<sup>はる</sup>風<sup>かぜ</sup>けなむか



木の芽の匂ひ風にまじりて来るよるは虎杖ツタもてる人とのりあはす

(車中折見二首)

つつじさへ咲きにけらしな乗合の人のみやげのかざしに見るも

水ぬるむ小田に集り鳴く蛙カエルの畔ほとりにはよらずこゑのはるけさ

田の目め中につどひて鳴けるかはづ子らすがたは見えね水ゆらぐと

ころ

ほのぼのと愁わくとさかはづらのすだく聲さへさみしらと思ふ

蛙子らおのがつまよび鳴くこゑもさびしと思ふ心こころ悵い鬱げせみ

青春のうれひはこれか春の空何か流るを仰いで止まず

わかさ日もつひにはすぢむ櫻咲く下びをゆけばその匂ひすも

幼ごひ思ひもいづるそらまめの花はさかりとなり（Fちゆんた）にけらすや



裁断橋擬寶珠銘のこと

湯原冬美

名古屋の裁断橋の擬宝珠銘のことは吉田博士『大日本地名辞書』川上菰山氏『妙心寺史』の三浦博士の序文『名古屋市史』等にもあらはれてゐるが、私が初めて之を知つたのは濱田青陵氏の『橋と塔』によつてであつた。多分末岡の方が多いたらうと考へるし、又私はこの珠玉の文字に愕然と心うはれた情熱の深さを今にいださつ、之を紹介したいと思ふ。いつか私はこの名文に深い洞察と、仔細な考證を試みたいと考へつゝ、

てんしゅう十八ねん二月十八日に、  
とたはらへの御ぢんほりをさん助と申  
十八にたりたる子をた、せてより、又

ふためとも見ざるかなしとのあまりに、  
いまこのはしをかける成、は、の身に  
はらくるいともなり、そくしんじょう  
ぶつし給へ、いつがんせいしゅんと、  
後のよの又のちまで、此のかまつけを  
見る人は、念佛申給へや、廿三年のく  
やう也。

天正十八年秀吉の小田原陣に陣没した  
堀尾金助といふ若侍のために母が三十三年の  
扶養に作つた橋の銘文である。没後  
三十三年の後になほ、母の身には慈愛と  
もなり、と云ふ切々の誓と、純なる至情  
の深さに私は辛くも放心を禁じ止むので  
ある。たとへば更紗の入り吉利支丹徒と雖も  
このひとむきの愛の聖なる発露には、  
世後の稱名と念佛を誦せすにはおられぬ  
であらう。こゝに現れた母の感情の如

きは一つの哀愍感情と云へぬであらうか。  
山内一豊の妻や木村重成の母の女人の  
留つてゐた中で、私はこの母にわたした  
の紅血の通ひまことなる人間、正しい母  
を見出し得たことはこの上ない喜びであ  
つた。茲に私らは母性の強さを見る。封  
鎖的権柄に強々しい母性により人間の純  
粹なる魂を通じて叫ばれた反抗を見る。

封建といふ制度悉へ対する端々たる呪が  
このかまやかな一女性の魂の至高の形を  
通じて、生々たる句と、けだかい異なる  
激性で私の心をうつのである。権力に付  
する浪曼的反抗は、この直截純情の文に  
一層の美しさと強さを加へるではなから  
うか。

私共の手に古い解像や古文書の雑積の中  
に、若々しい息吹を労費沈澁せしめぬ

はいられぬ者も、ときとそれらの断片零  
墨に——例へば書簡や金石文に——じや  
かたらぶみに——正史の語らぬ純なる  
魂の情熱の烈しさと人間性の眞実なる佳  
白を味ふこともあるのである。この核を  
興味はとう私等の襟を惹かす持主のみ  
の特殊感情となつたであらうか。



野崎村慈眼寺

取太郎

本堂の前に腰掛りてゐる。随分古いお寺  
だと思つた。樋岡の経馬も若んど削け  
落ちてゐるし百入一首の献額も破れて了つ  
てゐる。経馬には徳井の子別れの場や大  
森彦七の白と柄氏のものが多いのは四條  
畷の古戦場に近いからだらう。柱にかゝ  
つてゐる小さい額に目を定めると、五番と  
して

間くならく野崎のてらはその昔し

江口の君と名のみ残れり

天保十五年甲辰八月彌主何某とある。た  
どくしい歌だけれどすつかり氣に入つ  
て了つた。寺傳によると此寺の中興の祖  
が一條天皇の頃の江口の君ださう。西行  
と語つた人とは少し時代が古いから違ふ  
んだらうけれど此の女もやはり観世音菩  
薩と顯現したまふたさうである。腰掛の  
前にはお賓頭虚様が端然として坐つてゐ  
られる。茶店のお婆さんが線香を上げて  
御前を端でその手で自分の肩を叩いた。

そのお婆さんには本堂右手の坂を登れば  
お梁久松の墓へ行くと聞き行つて見る。

墓はつまらなかつたけれどする分い、眺  
めだ。此の寺のある高みから大坂城の高  
台までの間は昔の目下江であり殊にすぐ  
下の地は最近まで深野大池だった所で堀  
割が真直に通りその両側には並木のある  
堤が遠くつゞいてゐる。向ふの方に一面  
にある菜の花畑をのぞいては凡てのもの  
がドンヨリとしてゐて汽笛等の音さへこ  
もつて聞える。い、氣持になつて本堂の  
方へ下りて来て山門を出ると鬱金樓の香  
い花が憂陶しく咲いてゐた。

花つ、じ番ふくらむ石段のかたへの芝

に蛇うなる音

観世音菩薩は厨子にかくれますそのか

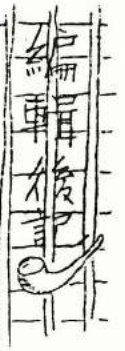
み人にあふよしもがな

童心は既に香を去りおびんづるの削け

朱の色をかたしと思ふ

うら山は人ごゑとほく日だまりの若草の

上を黄蝶とべるも



そのままに立場から歌を

考へてみることはいいと思つてゐます。私共はまたまだ考へるべき問題を持つてゐます。私共は前号で元氣よく私共は正しく現実を把握し交進しようとして先輩諸君に送りました。私共は――

私は強ひて私の作歌の態度をイデオロギツシユに解する必要を感じません。しかし、考へてゐます。『思想』が新短歌の同題を掲げてゐます。皆が、い。何でもよろしい。また

と思ひません。わかりません。本当は。このことは湯原の書いたものです。

『注火』の原稿は全部採用しました。効果の方は考へて下さい。兎に角嚴選された苦心の作は編輯者の喜びです。

今度から簡単な論文とか雑文をのせる欄を作りました。同人ノートといった形式です。見本といふわけでありませんが今度は僕らでかきました。どしどし利用下さい。

何でもよろしい。また

まつた論文ものせたく思ひます。

それから原稿の締切は是非厳守して下さい。

編輯をやるとこの様な仕事は面白くなく、荷重に感じることが多々あります。かなり不愉快さへあります。勿論愉快もありま

私共は新しい人々の加入を喜ぶ。私共は魂の純粋なる直観により直実を把握せねばならぬ不幸なる浪受精神の持主であると云つた。

私共は同じ様な氣持を愛すると共に、私共と異つた目で歌を論ぜんとする人々を敬に期待する。私共はいつでも腕を用けてゐる――

編輯同人 嶺立取太郎 湯原冬美



炫火

第四号

昭5年5月 (高3)

# 火 崎

第 四 分

み吉野の 耳<sup>み</sup>衣<sup>が</sup>の 鐘<sup>に</sup> 時<sup>を</sup>  
くぞ 雪は降りける 間なくぞ  
雨は零りける その雪の 時  
雪<sup>の</sup>如<sup>く</sup> その雨の 間<sup>の</sup>さが  
如 隈とおちず 思ひつ、ぞ来  
る その山道を

(萬葉集)

昭 和 五 年 五 月



炫火 第四號 目次 昭和五年五月發行

|        |   |   |   |     |
|--------|---|---|---|-----|
| 白      | 丸 | 三 | 郎 | (一) |
| 鮮人     | 津 | 田 | 浩 | (三) |
| 心      | 大 | 東 | 猛 | 吉   |
| しゆろの花  | 湯 | 原 | 冬 | 美   |
| 相      | 厚 | 見 | 莊 | 吉   |
| 吾      | 藤 | 鳥 | ま | み   |
| ふ      | 銳 |   |   | 二   |
| 近      | 梨 | 聖 |   | 夫   |
| 泥      | 志 | 摩 | 哲 | 夫   |
| 椛      | 嶺 | 岡 | 太 | 郎   |
| 新興短歌漫筆 | S |   |   | 生   |
| 編輯後記   | T |   |   | 生   |

しゆろの花 (しんせどう体)  
並びに序

陽原冬美

たどたどしい歩みを以て、思想的飛躍に伴んでゐたころは、わたしはわたしの魂のふるさとをいふべき木初へのあこがれに、純粹なる西源の憧憬に、新しい世界へのパトスを相闘争せしめねばならなかつた。然し魂のふるさとにこそわたしはロマニクの純なる心があり、この純なるものこそ新なるものへの大きい純情ではなからうか……わたしはその頃を思ふ。わたしはロマニクであつ



た。そして今もわたしはそうである。がわたしはこの  
日頃久しく歌を作る意味にたらない。わたしはあの頃  
の古い歌を二度読み返す。そしてそこに二度新しくそ  
の頃の心のふるさとへの志我のさまを思ひ起す。魂の  
あえぎが何に由来するかを知った今でもわたしの魂の  
ふるさとにはあまりにも遠く、ゆめにさへくろしくあえ  
ひてゐるではないか。……(以下の作品はずっと古い  
ものである。)

その一

さびしさは またたち帰れ しゆろの花。うちひさす都をいでてい  
く日かへぬる。

その二

ふるさとに 又来むときは あせび生ふ 山びの下をわかちこぼ  
さを鹿のなく あせび群生を。

その三

川ぐちのうなぎの下りはやぎとき、白き魚死す、その瞳 赤くにこ  
りて白き魚死す。

その四

ち、のみのち、は、そばのは、ともに在る日は死せざらぬやも、  
その手の中に死せざらぬやも。

佐々木青葉村先生に

桃の花たわわにさけばあかつきの葉の花みちはうれしかりけり(葉  
師寺)

芍薬の蕾にツドム蟻の群衆の木べを登れるもある。  
 日が経ては芍薬の花も開きたり蟻の一群はるすなりけり。  
 青あらし吹きつゝの午後あかしあの匂ながれて室に未れり。  
 獸の臭どこからか来てむしあつさ此の晝は教室に蛙を聞けり。  
 体の調子今日はよからず山道の曲り角毎の木苺の花。(六甲山に登る三首)  
 山に未てひしく寂しさが身に迫る向ふの山に人のゐる聲。  
 どんよりと曇る空には動くものなししみかに重き大氣の圧力。  
 おもおもと曇るゆより未る浪の千重しくしくにこひしきわきみ。  
 五月の山は若葉蒸されてあつくるし下木つっじは紅きにすぎたり。  
 飛べよからす鳥田にゐてものを食む垂れしうなじはさびしかりける。  
 王葱畑の畦道のすかんぼの花は南蛮更紗にさも似たりける。

棕 櫚 の 花

嶺岡 歌 太 郎

魚の卵に似た黄色い花房がいくつも棕櫚の幹から垂れ  
 下った。南國的な晴熱の對に雨が降れば濡れるその花  
 はあまりに普人的であると云はねばならぬ。

おほろかに春陽さすとも落の葉の下に繁縷はこばく花にそそぐともへや。  
 青葉青葉それにてる陽はかなしかも夏近づけば反射強からむ。  
 何ごときいはむとしてやおのが身をかへりみる癖つきにけるかも。  
 棕櫚の花咲く此の頃の雨多み潤ろひ早し實とはならざらむ。  
 やうやくに強き陽さしよ芍薬の蕾に蟻はむれてゐにける。





編輯後記

僕等の焔火も遂に三号雑誌に終らなかつたのは全く湯原君の熱心のおかげである。こゝに同君に厚く感謝する次第である。

願れば横らの焔火は存在以外には何等意義のないものであつたかもしれぬ。それは屍花そのものであり燕雀そのものであつたかも知れぬ。しかし一待未だ何か期待出るとならばそれで十分であらう。

S T君が歌論を書いてく

れたのを謝する。そして僕

は同君が確たる目標を把握されてゐるのを甚だ羨むのである。前に言つた混沌燕

雀とは僕の歌に外ならなかつたのだ。

湯原君と同じ題になつたのは全くの偶然である。しかし横欄を愛しはじめたのはやはり同君の影響であることは認めねばならぬ。それから銀閣寺の燕村の棟の椽と鳥。

我々浪漫主義者は甚だ不幸であり又幸福であることを見みじみ感ずる。不然乎。

湯原君。(みわおかこゝたる)

X X X

「しゆろの花」の題のこと

と嶺丘君の云ふ如し。わたしは嶺丘君の家のたくさ

え種はつた「しゆろの樹」にさす蓮日を愛しみつゝ話

つた日。あの日わたしはこ

の「聯中のいくつかを君に見せた筈だつた。私はあなたを愛し、あなたの家の椽

を愛し、あなたの歌を愛し、そして私の「しゆろの花」を愛する。私が枕の字を、

ろこぶ氣持は君のみ知つてくれるだらう。

X

わたしらの歌は現実を遊

離するところに美しごと、心のとさめさを感じたのでなからうか。「心のふるさと」を憧憬したわたしは、現実の生の圧迫を、打破するときのみ幸福があつた。しとしとにおしよ

せる過酷醜悪なる現実のその爲、わたしは藝術への逃避を喜んだのだ。然し今や私らの魂を圧迫するものが何なるかを知つたとき、

私は真なる古代なるロマニエークラの傳統を追つて、丁度一八四八年二月革命に筆を剣に変えて革命雜誌を

発刊せんとしたボードレール

ルの林に、新しい現実をめぐらすことが今日のロマニエークの純情でなからうか。(理論はしばらくおいて)

二月革命はこの「悪の華」の詩人に「藝術の爲の藝術」の理論を「Pauvre」小兒

物(の)と呼はせたのだ。浪漫化の現実遊離性

は今日積極的に新しい現実の建設へと向ふべきものでなからうか。茲にのみ私は

私の「多くの青年の浪漫的者なるを誇りと思ひ、又この点に眞の古き浪漫精神を見出し、そしてロマニエークが初めて不幸であり、又

幸であると思ふ。

不気子、嶺丘君。(不美)



大 越

第  
五  
號

昭5年6月



# 火 燐

第五号

野有元麇 白茅包之  
有女懷春 吉士誘之

野に死せしくじかをば  
ちがやもてうちつゝみ  
戀を懐ふたわやめを  
みやび男ぞ誘ふなる。

(詩經、國風、召南、野有元麇)

昭和五年六月二十日

炫火 第五號 目次 昭和五年六月二十日發行

|          |       |      |
|----------|-------|------|
| 大阪のお城    | 北島進   | (一)  |
| 海住山寺     | 大東猛吉  | (二)  |
| 踊る人形     | 湯原冬美  | (三)  |
| 初夏雜詠     | 志磨哲夫  | (四)  |
| 紫陽花      | 厚見莊吉  | (五)  |
| 六月の歌     | 澤曼沙矢  | (六)  |
| 病其他      | 北能梨聖夫 | (七)  |
| 廣島へ汽車にて  | 藤島さみ  | (八)  |
| 懐風藻所載宇合作 | 山内しげる | (九)  |
| 五言一絶につき  | 湯原冬美  | (一〇) |
| 断片的に     | X Y 生 | (一一) |
| 編輯後記     |       |      |

海住山寺

— 旧蹟神童寺越 —

湯原冬美

上つ路はあかつき路のうすさむさ竹のたり花たわわにさけり(天和路)  
 ゆく程に下の坂のさやかさや若葉の匂ひくまおちすこむ  
 ゆくりなくつみぢさりたるすかんほの青さにはひの指にしみるも  
 かまれば夏くる色の眼にしみぬやまもねばらのつよき光も  
 時ゆけば山うくひすなく静けさやまひるのもだに心つかれぬ  
 うらごひて山路をくれば今年竹あら葉のてりは眼にしみしるし

恭仁郡跡に佛生寺といふ所があり、海住山寺はその附近である。海住山寺の山を下りて恭仁郡跡の礎石



がある。恭仁大橋附近の旧都跡は美しい所だ。海住山寺から川に沿って下つて三十町位、右廻して山に入り、神童寺に出る道が「旧蹟神童子越し」と標柱がある。にはしい道である。古くから僕はこの附近の地名を憶懐してゐた。中田英一君が誘つてくれたこのあたりを巡れし、蟹嵩寺の釈迦に驚嘆し、観音寺、一休寺、甘高備寺辺尋ねたのは五月の末であつた。佛生寺、海住山寺、神童寺の名が私にたまらな好さである。そしてこの一聯の作は中田君への感謝の心である。以上附言する。

山路ゆけ、たゞひとつ葉も夏の色。

## 懷風藻所載字合作 五言一絶につき

湯原 冬美

萬葉集卷六に天平四年壬申藤原字合卿西海節度使に遣さる、時、高橋蟲麿作長歌(国歌大観本番号九七一)及び短歌がある。短歌の方は非常に有名で、万葉集中の代表作の如くしばしば引用される。

千萬の軍なりとも言挙げせず取りて承るべき男とぞ念ふ(訓讀新訓万葉集)

といふ一首である。之を當時の漢詩集として我國最古のものである。懷風藻に見るに、そこに字合卿の同じ時に作った「五言奉詔海道節度使之作」といふ一絶がある。

住巖東山夜 今年西海行 行人一生 衷綫夜港=連兵一

私は此を先きの蟲麿作歌に比較して甚だ興味深く思ふ。戦ひに倦んだといふこの武人の本音が面白くはないか。字合が蟲麿の作歌に苦笑した、らうことを想像するのむ愉快である。万葉集といへば剛健質実なものと思ひ込むことはどうでもいいが、萬葉の本當にいいところは決して帝王讚美につさるのではない。字合の時代を考へる時私らは初めて天平をありのまゝに理解する緒を得べく、そして字合の詩句の表現が如実に彼の時代を反映してゐるのを知る。かくて徳良が出現したことは不思議でない。「御民吾」といふ帝王讚美のことはが決して天平のすべてでない。しばしば辺境防備の平民奴隷の切実な生活の反影とその表現に反抗と呪詛がしみこんでゐるのを知るのではないか。東歌を防人歌を苦役人夫の作



品を見よ。本当の反抗と呪詛の作畫がやはり當時の選者により採用されなかつたことは事實と考へられるか。それでもなほしほ切実な不平の沈在が感じらる。

従来學識此概士

と教ふ詩人徳良を單に唐土模倣の新思想家とけなし去つてはならない。「貧窮問答」のこの反抗的高風者のみが数少い名譽ある帝王讚美の一首と不作らなかつた純粹の歌人であつた。人磨は帝王讚美の宮廷詩人であつた。徳良は少くとも人道主義的反抗家である。この二人には時代のへだたりが如く實にうかがはる。人磨から徳良への継承に私らは黒人、意吉磨を見、旅人を所有する。彼を觀念的人道的ならしめたものもやはり時代である。明に私らは次りてくる家持の時代が享樂と裝飾へとわしうねはならぬの

を知らであらう。芸術が裝飾芸術となつためには背後の生産關係の發展をまたねばならない。

東歌のある者が、防人歌の教權が何故に帝王讚美のものより私らの心をより強く抗があるからである。然し之らは不平を脱出せぬ弱々しい浪漫的反抗である。帝王讚美の平易調には愚作が多い。之は人磨に於て既にそうであつた如く又古くからの一般評であつた。集中既に奉上する歌の創作に若んた記録さへある。かゝる中で有名な作家中徳良だけは帝王讚美をうたはずに當時の貧窮生活を歌つた。そして今日私らの多くの興味をひく作者は決して人磨でなく觀念的といふ人道主義者徳良である。理想的といふ点で、目的的に於て私らは徳良に

関心をもち。人磨の芸術が既にたゞその時代に於ける一様態として私らを愛しましめるに過ぎないが、徳良はなほ遠き、而し可能なるは、名を以て私らの今日の芸術に流布する。人磨と徳良の批判的比較に於てもわれわれは決して人磨を徳良の上におかない。芸術が時代を離れて存在せぬといふわれわれの興味はその時代と社会思想形態にある。今日の時代は人磨よりも徳良を關心するのである。

民族の声を正しく傳へた万葉集は決して思想善導のため都合よく出でていない。本書の団体觀念の時代的変遷とその因果關係を知らために万葉集を読まう。しかし萬葉は資本主義のない時に作られたものだ。決して資本主義擁護のため作られたものではない。ブルジョア・プロパガンダのみでない

に狂奔にかゝる聖なる古典をけがすことを義噴する。古典も亦われわれの批判を通じてわれわれのものである。「往歲東山段」云々のこのアンチ・ミリタリズム文學が思想善導をするか？ 但し詩経から芸術を体殺した（この点彼ら日本唐土の似而非儒者らは孔子のもつたあのよき藝術は何ら理解しえない）御用學者らの評註だけわすれぬだらうが――





編輯  
後記

六月十日締切厳守！十二日

厳守！また伸びて十四日限。た、どうもこの趣味は餘り  
り、それがさらに十七日、にも濃厚に過ぎます。  
かくてとうとう五号が出来、

新しく山内しげる君を御紹  
介する光榮をもちます。

X X

終りにXY生氏に湯原冬美  
として。

(山)僕の「環」十一号に書いた  
「芸術の新しい」といふ論文を  
お読み下さることを希望し  
ます。

(山)「過酷醜悪なる現実につい  
てはあなたの方の分析の通りで  
す。然し私はあの時即座に知  
てせうがあの「レハーノフ  
の芸術と社会」にある芸術の  
為めの芸術の発生の理論を  
心に考へながら書いたもので、  
(山)君が寛大にわれわれの無

意識な及動性を許されるの  
は少くともわれわれが進歩  
の側面に沿ふものであると  
思惟するからですか。

ばの高慢さは許されたい。  
(山)最後に君に眞実の浪漫主  
義と戰鬥的唯物論の世界観を  
校照思辨し、かゝる遊びは君  
はさらふかもしれませんが

(山)僕は既に短歌の芸術性に  
疑いをもつてゐます。(前記  
「芸術の新しい」参照)

性(山)「あゝ！彼らのうらには  
二つの魂が住んでゐる。」  
之は誰のこと、はかわすれ  
しかしこの彼らには暗然  
がある。

(山)君は過度に僕の「ラドツ  
クス」を誤解しましたか、る  
意味で僕は君のかゝる論文  
をまつてゐたので、確かに  
君のはタイムリー・ヒントの  
効果があります。(僕のこと

「されんことを希望します。  
(山)短歌のイデオロギーは封  
建的です。(しかし之は及動  
性の弁護にいふのではない)

(山)「あゝ！彼らのうらには  
二つの魂が住んでゐる。」  
之は誰のこと、はかわすれ  
しかしこの彼らには暗然  
がある。

君の一文をありがたく受け  
ます。

(山)君が寛大にわれわれの無  
効果がありません。(僕のこと

(山)君が寛大にわれわれの無  
効果がありません。(僕のこと

(湯原冬美)



大 燈

第 六 號

昭5年9月 (高?)



# 炫火

第六號

月のおもを、さわたる雲の、まさやけ  
くみる、なほの、丹江の、秋なれば、  
霧立ちわたる、なほのつぐら江。  
伊勢人は、あやしきものをヤ、なとて  
へば、小舟に乗りてヤ、波の上を漕ぐ  
ヤ、波のへまこぐヤ、  
（風俗）

昭和五年九月

## 炫火 第二號 目次

|           |       |      |
|-----------|-------|------|
| 宵宮の日から    | 三崎 滉  | (1)  |
| 竹増俊明追悼録七首 | 湯原冬美  | (5)  |
| 夾竹桃抄      | 嶺丘歌太郎 | (6)  |
| 歌十四       | 厚見莊吉  | (11) |
| 早魃        | S T 生 | (13) |
| 晩夏初秋      | 柳尾徹   | (15) |
| 歸省雜詠抄     | 北能梨人  | (17) |
| 夏の田家にて    | 郷忍冬   | (18) |
| 室津みなと     | 佐波曼沙矢 | (19) |
| 秋たつ頃      | 山内しげる | (21) |
| リアリスム     | 大東猛吉  | (22) |
| 編輯後記      |       | (21) |

——藝術的世界觀覽之書——

竹増俊明追悼録七首

湯原冬美

風たてばとゞろくなべに杉の木の雀はとべど啼かざりしかも  
杉の木のとゞろく音ははたと止りぬ羽根白き蛾も止りゐるかも  
なつの日もいつかくれけり谷の間には沓えかへりつゝ杉の響はも  
あめつちは静もりゆきてなほあつし夜半すぎて出づ月の赤さも

去夏君と東京にゐたときの歌をなつかしさの餘り記す

虫うりの語るたわけに立ちどまりなからざる虫をみつめておれり(一九二九年七月作)  
舟の類のまよめかなしといひしま君のけか東海洋こえてゆきにけるかも  
まながひにうかび来るはいくたびぞたちまち消ゆるおもかげの悲し



爽竹桃抄

嶺丘 耿太郎

×七月七日

植込に夾竹桃は咲きさかり浮浪人らは作かた倦むらしも  
噴水も水ふき上げざる日のまひるころ樂し身はひた疲れ

×七月八日

小石も

雨そそぐ大川の面に芥流れいたくわびしきゆうべとなりぬ  
ゆうされば鳥ねるとふ法院の塔の向ふの雨空のくらす

×七月十一日

大御濠しづもり深くひつじ草しみみに生ひて花保ちなる  
みささぎの濠の静けさぬか雨かかる小舟に菱採れる人  
曇り空のみんなみに立つ白雲を暑しと思ふ道向ふところ  
彌勒菩薩のみす御堂のかび臭い出せしたまふ時節とほからし

×七月十三日 (森の墓)

みんな集つて泣いた日が近づくみ墓べの模の木さへも茂りたるかも  
御墓邊にしきみを捧げ水を手向けわれに出来るはこれのみと思

×七月十四日—十八日

汽車とまらぬ小驛の村の花畑カンナ大きく咲けるを見たり  
大山の裾たつづく松林じんじんと重き蟬のこゑきこゆ  
城堀の蓮の花のさかむ時とほくわれらの来りあひたる  
あらし来るけはひしるしも線路のたの紫陽花の花重たく揺るる  
はやり風梅田わたれば靡きふす稲葉の波のやはらかさほも  
ぼっぼつと雨ふり出でて車窓をうち山陽道に汽車ひた向ふ  
眼ぎむれば頭おもたきひるぬ後高梁川も大くなりたる

×七月二十五日

夕やけて蟬も鳴きこゑ止めんとす大空の虹うすらみにけり

×八月三日

ゆうぐれは巨き黒犬牽きゆかしむあをおほ犬と人の云ふなる  
ゆうされば生駒の山にともる灯は高みより来るすいしき保てり  
黒犬とたそがれ道歩み来て口笛吹けど誰かきたらむ

×八月四日

朝涼は大寺の堀に咲き満てる白蓮の上に風わたるかな

×八月五日

半鐘がきこゆるといふに話ごゑにはかに止めて皆きくらしも  
妹らは火事どきの用意話し出づ女の氣弱さときき流されず

### 鳳仙花抄

×八月八日

夕ぐれ聲なき犬をつれてるさみしき、かやつり草を引きぬく。

夕雲のはしにまだ残るひかり、大空高きさむさを思ふ

×八月九日

月梧桐にかかつて一西瓜くつてるぼくは、いつかの夜をくりかへ  
してると思つた

槐ほろほろとちるよるは、屋根を歩く白猫の、足音のさぶしさ

×八月十日

月夜のりやんりやんと鉦叩いて、おぼあらるる家、のぞいて行く  
ちりりちりりと月夜の虫、とほのいて行くさびしさよ、みち

歸れば、虫わが庭にも、青蚊張吊つてねるに、

犬の動く氣配戸外にして、夜更けと月はのぼるものか

×八月十四日

花のない浜ひるがほの道の果は海である。  
はまごう咲いた砂山くずれて、ふるさとの友だちの行方知らず



×八月十八日

鳳仙花はぜるゆうぐれば、みつめると太鼓の音がする

×八月二十日

港をめぐる灯さみしく、灯をうごかしてランチが来る  
月まだのぼらぬ海面は、魚の跳ねる音に充ちてゐる  
夜が更けやうに、突堤の先に、魚釣る人

×八月下旬

無花果に日暮れて、家蔭に、女が行水ある  
砂浜のかはらよもぎに、ぼった飛んだを、子供達はんとする、止める  
凋んだ月見草に、朝雨の露ある、濱へ行くみち  
廢園の纏紅草の朱花、蔓を引いてちぎつて来る

## 編輯後記

秋風や白木の弓に弦はらん（去來）秋の  
白さと共に「燈火」第六冊に示された様  
が餘りにも滑稽的の顔唐しがあり得なかつ  
たことを恥ぢる。僕はしみじみとした哀愁  
にさへも似て大東猛吉の（リアリズム）の  
前半の示さんとする示唆を讀まねばならな  
い。フロレタリア短歌が存在し得るか否か。  
此は問題でない。だがあり得る所にあるに  
他ならない。それ故「藝術の悲劇性」は藝  
術の悲劇性でなく僕らのもつ、悲劇性（主観  
的）であると思ふ。大東は僕に何か書け  
といふ。僕はしばらく考へよう。客観的の

状態を見ない時われわれはしばしば餘りに  
も主観的な事情に左右せられる。学園の冬  
は眼のまへに另れくるつてゐる。

×

この原やわれ一人こし道とほき歸れとい  
へど餘りか遠し。——大東に示す。

×

鶴丘がだん／＼オリゲナルな風格をそな  
へてきたことはうれしい。僕にとつてはち  
ようと利玄の様な格調をもちだした——漸  
く独自の——ことは何といつてもうれし  
い。僕の云ふのは勿論前半の方である。後  
半に顕著なセンチメンタリズムについては  
しばらく黙視したい。

椎の花の心にも似よ木曾の旅（芭蕉）

大 檢

第七 類

昭5年10月 (高?)



# 信火

第七號

いかにすびりとさんと來り玉へずい  
 しんのこゝろをみたせ玉へ。おん身の  
 愛欲にもやさせたまへ。此職業の苦樂  
 を御主の御功力と共に捧げ奉る。何卒  
 おん身より命じ玉ふつとめを行ふの間  
 罪科を犯さざる様御合力をなし給へ。  
 あめん。

がらさみちく 一遍  
 はてる、ひりよ、すびりとさんとの  
 御名を以て、あめん。(聖教日珠)

昭和五年十月

昭和五年十月二十七日發行

火 炫

次 目 號 七 第

|       |              |      |
|-------|--------------|------|
| 湯原冬美  | 似無愁集鈔        | (1)  |
| 嶺丘耿太郎 | アルトハイデルベルヒ其他 | (7)  |
| 津田清   | 峠への道         | (8)  |
| 大東猛吉  | 月の夜          | (10) |
| 詠     | ニ山では         | (11) |
| 柳尾徹   | やまとへ         | (12) |
| 北能梨人  | 秋十月          | (14) |
| 佐波曼沙矢 | 初しぐれ         | (15) |
| 山内しげる | 秋日抄          | (16) |
| 三崎晃   | 巷で           | (17) |
| 編輯後記  |              | (19) |

似無愁集鈔

湯原冬美

その一

三日餘り風邪でなましに

いたいたしきあはれさおもひてこの夕べ無花果のみを食ひにけるかも

實をわれば小さきしべも並びぬるそこはかとなき淡きかなしさ

いちじくを指にて壓せば貴なる液流るはかなしうすさむき夜の

いつしかに草に日の入り夕ざりぬけものめきたる和念はあれど

しらぎぬをあでとおもへばひと殺す偷盗のつまにもなりしものかな

その二

さむさむと少年をどめをいたきつゝ死なるといどむ湯のまちのあき

その三

ゆうぐれは口笛ふきて山くだるいたくあはれしひじのみのとけ



みんなして永死人見よさした山の池の交をとりつ、思ふ愁しさ  
水死人は美しき花人にみせて子供誘ふてふ話き、しも  
夕ざりは露力はひくろうすひかり處女にあひしつ、みの遠さ  
しらかべに椎のひかりはうこくなり處女の家はともしきあかも  
ゆうぐれは鳥のかへるやまたり木あまたの敷にいぶかりにけり

その四

——は、を、津田清に

ひそやかに母嘆すらく園禁の書にみ憐くる長男をもつ  
庭に咲く雁来紅はひろの色さしぬうつしみに若き子もつ母かも  
あがはつとも悲しとおもへどうつしみを容るゝに若き子供かなしも

その五

冷やかに父と争ふ卓の上の鳳仙花の花いくたひちきりし

たそかれは労働者と行き交ふ町かへる革命の日も近きか思ひつ、  
夕されば若き二十のころにはしづけさありやひそかに思ふ  
テロリストのかなしき宿命も思ひつ、宰相の事に爆弾をうつ

その六

——拳銃とうたふ

冷やけき金臭かなしみピストルの大きひ、子をうつろと思ふ  
ゆうぐれにピストル出していぢりいぬ止めよと母のとむるをきかす  
ひき金にこ指のさはるひや、かさたくれ近くのしづごころなき  
肌のぬくみ移りしピストルをかなしく胸に感じつ、夜のまぢを思ふ  
つめたき拳銃のひびき夜の都府の暗黒の鉄崖うつ瞬間の牙え

その七

——釋迦

海彼來の秋父讀誦の香台も釋迦のおしへばかなしかりけり

いたましきも女犯赦へし釋迦如來いまはがきわのやすかりしこそ

わすらえぬ都城の美女もほのぼのといまはのときに想はざらぬや

ほのぼのと和望のこゝろおもふとき盧佐奈ほとけはまなことさせしを

にひ發意の比丘尼にもられみほとけははく息いる息ものいはすけり

ルリ・莊嚴

比丘たちに精舎の女戒とくときは父母交合をあはれまざりしや

ひそやかにみうちときめきおもひけめ佛うみけるをんな思は

善男女のぬかづくときは摩耶ふじんほとけはらめる夜はおもはぬや

### 回向集鈔

死ぬるいまはまできとめを愁ひつゝ、はたりの血しほを大地に流し  
て自害した友のために

かなしきは松葉牡丹の花ちぎりつゝ、女ゆえひと殺さんといひし人はや

かよわかき、愁ひは多し。ようように、成長ひづく頃や、いのちすてけむ

まことごころはなかがらぬやほ

小夜ふけて、時雨のあめは大ふりとなり、ふりにけるかも。みぞか心、わ

れはもちつゝ、たえてゐるなり。

x

ひたごゝろやうやくしりて香を炷ゆたごこれのみもたふべくあらむ

火葬場のしゆろの立木にかゝる月およ夜のきりにあか、りしと思ふ

月空に高くなるとき赤々とほふりの火は燃えにしものを

x

うつくしくすなほの氣質は世にたえぬやも秋くると思ひつゝ、いきのこりけ  
る



をどめこの双乳はあはたけがさ、うめや生命若く死せる人はかなし

なま友の母のことばに

いのちなりと思へど夜半のねざめには君のおもかけぞまながひに消えす  
なげきつゝ、かたらふひと、むかひおれば、かにかくに、君死なさじ、  
と、思ひたえぬやは。

友の母もやはり心臓の寒さをかこつ人だつた

ひそやかな寒さ加ふるあさなま血液の流れはつねならすけり

### 似無愁集鈔拾遺

かの人に二首

君と居るがかなしくあればまぢに出で革命の画案かひにけるかも  
にぎやかな巻の埃を吸つて帰り日本の花をなつかしむかな

かはのきりほのかにあましほつたりと城山の灯はつきにけるかも  
月かげはちまたにふけて馬車の音かあるはけふも酔ふてかへれる  
ほろほろとびいるにかけれかのよるのけていのばらにとげありしごと  
かはの音たかまりしときいととてかあるはわれによりにしものを  
まどのそときりは流れてきりがくれているのこひになくぬきこゆる

× 高き山せまれるまちにちりのみのうちと争ふゆめをわが見き

× 秋の日はすくきにさしてこのみちのとほくへ半はゆきにけるかも

× 柿もみぢいろづくころか鳩鳥は峽の池にひそみためたり  
ものゝ花やうやくたけてこの朝息の白きをわれは見にけり  
ゆうぐれにはさま田の畔われらゆきふぢばかまの花白きを見たり

編輯後記

先号の山内しげる君「秋  
たつ漢」は次の三首がプ  
リント所の不注意から落され  
てゐましたからこゝに記し  
ます。作者には申しわけあ  
りません。

朝まだき山あひ行けば宜  
生路のつゞれかゞしに露  
のおけるも  
宇陀川に沿へる山路の奥  
浜み木の間もれくる日か  
け青かり  
赤垣のさみしき守にほう  
せん花赤く散りとり秋た

ちぞめば

×

場原冬美作のうち第六首  
目は次の如く訂正します。  
(竹増君俣録七首中)

舟の頃のをどめかましと  
いひし君海洋こえてゆき  
にけるかも

×

ミスプリントは次の号で  
訂正しますから発見したら  
編輯人の方へ御知らせ下さ  
い。

×

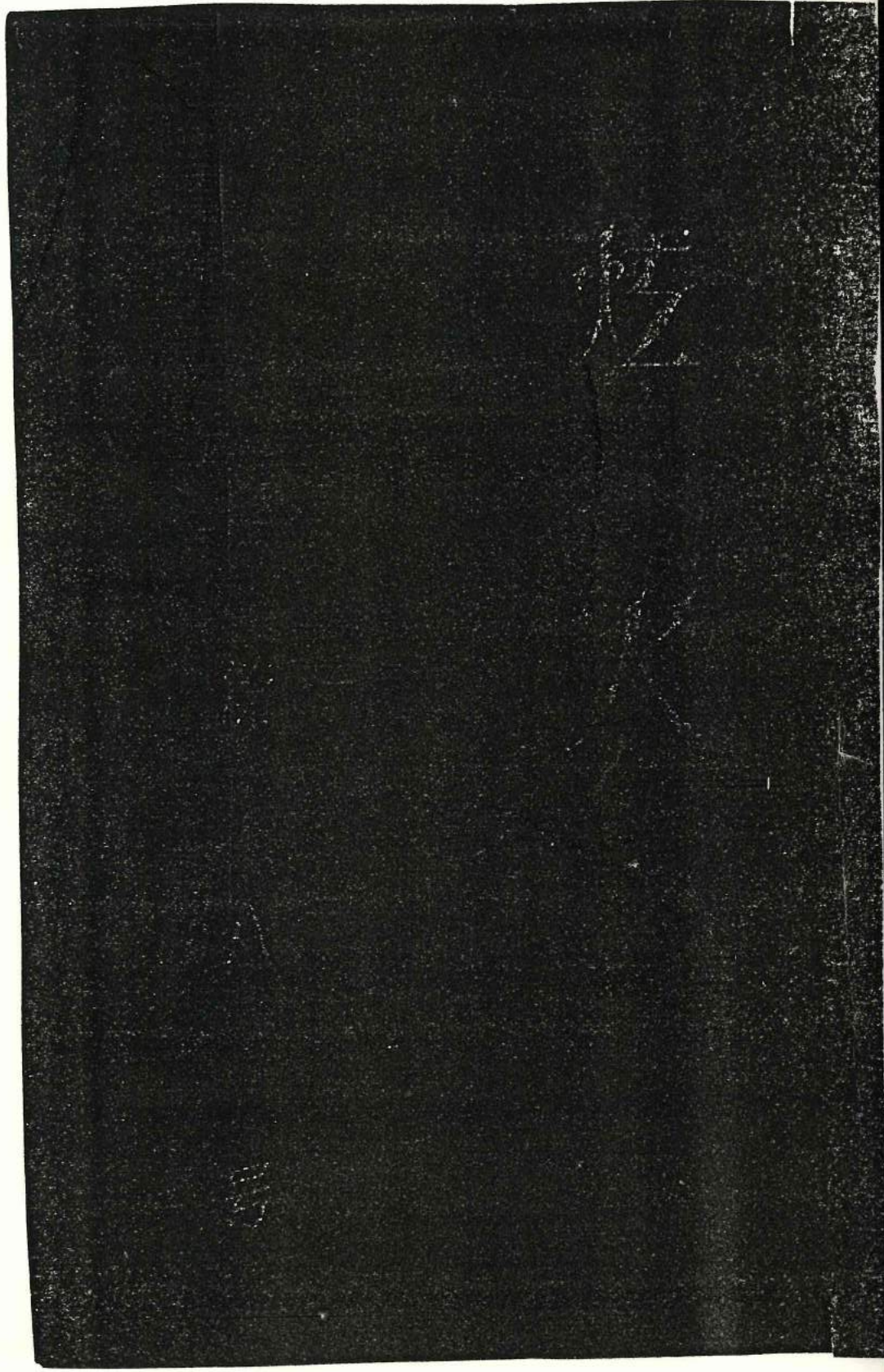
聖教日課は上田敏博士の  
観刻本でかなり知られてお  
ますが、扉のものは書中で

も添して添れたものとはい  
へませんが、短くて適当で  
すから、此をひきました。  
此は「勤王はじむる時の語  
といふのです。(F)

× × ×

原稿が戻りないと云ふの  
で、放課後の若くの時分に  
また作りされた。ちかごら  
しみくと歌の歌のへる歌  
しさを思つてゐます。古人  
の所謂「歌ご、ろ」茂吉氏  
の所謂「内部衝動」そんな  
なもの、消えてゆくことを  
感じるのは、僕の様なせん  
ちめんだりすには淋しい  
ことです。とまれ、之は自





昭5年12月 (高?)

# 楽情

第八号

あはゆきと、きゆる此身の、おも  
ひ寝にうき名をいとふ戀の中<sup>ま</sup>み  
だれしまゝのびんつきや、義理と  
いふ字はせひもなく ゆめか、う  
つゝか あさがらす  
(新古端唄集第三輯)

昭和五年十二月



炫 火 第 八 號  
= 目 次 =

|       |             |      |
|-------|-------------|------|
| 湯原冬美  | 石魚集鈔        | (1)  |
| 嶺丘秋太郎 | 河内國原その他     | (5)  |
| 詠     | ある断層        | (7)  |
| 厚見莊吉  | 都會主情派       | (9)  |
| 佐波曼沙矢 | 白晝夢其他       | (11) |
| 北能梨人  | 秋夜に題す       | (13) |
| 山内しげる | 冬が來ます       | (14) |
| 日根良吉  | 首相遭難の號外に接して | (15) |
| 藤村聰   | 雨來る         | (16) |
| 御正美   | この日ごろ       | (17) |
| 佐伯信男  | 無花果         | (18) |
| 大東猛吉  | リアリスム       | (19) |
| 湯原冬美  | 玫瑰花冠の花園     | (24) |
| 嶺丘秋太郎 | 萬葉地圖(其一)    | (26) |
| 編輯後記  |             | (30) |

石魚集鈔

湯 原 冬 美

津田清に(この一首はまへに蕪村と歌つたもの一つです)

海市ゆきしにほふ未通女のかなしやや紅毛の國旗みれば泪おつかも

A ふたたび山

ほろほろと谷の木わたりとり啼きぬあれいとひてさがそうとする

息づきてくたりの坂のほげしさを日本の草花かたりけるかも

ふたたびは來めやと念ふ山くだりつはろはると海原とをく見えにけるかも

B みなとまち

くすのきを風ふきすぎてぬたりけり坂道昇りをとめ歩めば

C タぐれのいろ

いつまでもゆうぐれの空にひるがへる青天白日旗の碧きくれいろ

D 夜のせんちめんだりずむ

にござる腫のをんな人呼ふうら巷に衆道のはなしかたりけるかも

くれゆけば港の船の音のこり人間の母はかなしいものか

E 夜のでんしや

たちまちに菊の白ひのながれしをほとほとねむりおぼえておりぬ

F 軍艦

海港は眞紅色にゆうぐれぬ虚無の海鷲の羽搏のおし

海港に軍艦とまりお祭のよる職場を檢束される黨員のむれ

うつゝの花の姿

一

教會の花ちる彌撒の樂きこゆ石たゝみ道をとめと昇れば

あはれなるまつげの色の憂ひさをひたぶるにそつといきんとするも

二

まどめらの傘さしいそぐうしろかけ男の性慾の不快さをおもふ

細り身のをみなをうれふあはれわれをとめ犯さじと思ひけるかも

この朝のえだにのこりし無花果のさま非現實の恋はちぎりて捨てよう

三

鏡見れば食べもの恋ひて烏啼きし直にうれしくわれはなりけり

にんげんの生命かなしも雨あがり大川の水はにこりてゐたれり

四

いたいたしき海後宮の美女たちに灯として歌書かうとする

でんせつの後宮の美女の性慾はあはれうつゝに美しいと思ふ

五 一こつたらうに

なまけつ、ありと思ひけりひそやかな冬のけはひに蜂つるむなり

くさ原はひろびろとして道細し人ゆくと思ふは何故かと云ひたし

くさ原のはてしは遠しあの家には花さく庭のあると思ふか

古代のはな(とうはんどうのうた)

人間も鳥獸魚介のかなしさもいづち変らぬ父母所生のひとこる



うつゝには古思へばあかづねのつめたき觸知樂しむわれは  
まなこつぶれば人は來ぬらしみじか日の夕ぐれ早くなりにけるかも  
雲かへる風ふきすぎる白菊の叢はれゆくなべのさゆらぎのひかり  
白菊のさゆらぐ反射うつむくは風すぎゆきしなごりなるらし  
をとめきて争いの果いへるらし書縁の光を樂しまんとすれど

十一月七日！

勞働者ら巷ゆきかひうたごゑはにかしけふ十一月七日の日！  
まらなかに勞働者おほくあつまつてくる人のいぶきにこゝろおこしぬ  
昂奮のあつさおぼゆる頰なめて夜ふけの風に入ら腕くまんと

### 河内國原その他

嶺 丘 耿 太 郎

憂ひつゝ道を來れば十月のともみづる山に近づきにけり(四條村中垣内)

常磐木に紅葉ばしるき秋山に日光かげりて寒くしなれり

まなかいの丘の傾斜に家はあり百濟王家も絶えにけるかも(甲可村中野)

たまきはるいのちもてあそぶこゝろおこる雲多き日に野に出て來し(豊野村小路)

さむしらに遠つ山脈はてしなし山かげにして山はありしか

笙鼓ならし祭のむれの行きしあと獨をわれは行きにけるかも

雲のかげ山にうつりて寒きところ役の行者を幻に見き(廢屋川村堀海)

かなしみはひとに告ぐるものならず眠ふせて薄の路の幾時を來し

朝の霧やうやく動くころとなり暮人蜂起を聞きにけるかも  
夜の間を焚きあかしたるかぶりどの土の黒さを人は見にけり  
蘭の花梢に咲きて散りぬたりいまはをひとの息づきしかも  
この藪とあの藪にひと死にたりとのち見む人ら云ひ行くらんか  
あまかける飛行機に乗り日本人草葺小屋を攻めに來るかも(討伐隊追る)  
山あひの世界をせばみ暮人ら物知らずしてはふりつくさる  
山峽に粟作りつゝ生ゆかし人等屠りつくされ粟は枯れむか  
銃の音この山峽にみちみちて銅色の日は昇りけり

× 松浦悦郎に  
連丘なみかたのはたての空に月落ちて沼地に鳥は鳴きつどひけり

### 玫瑰花冠の花園

(蝸居軒房おうらいしゆ、鈔の一)

湯原冬美

夏山や君がかなしき山の相  
山路ゆけたゞひとつ夏の色

高野山  
山はゆれその葛の葉の道のさま



嶺丘取太郎の「夕ぐれしに和して」

行けば行けばつばな原はくれずけり  
かなしければ沙魚はそのまゝ逃しけり

Requiescat in pace

ぬむの花をさなごころのさながらに

童心 2

縁日に見るものすべて買いたいな  
巻に出てアセナレニガスかいできな  
ゆふづつをまろびつゝ見る暑さかま

宣生寺吟行録四句

水まして白魚釣けり山しみづ  
うららかに尊者とんぼは生れにけり  
秋近き心ひかるゝほとけにけり  
しやくなんに蛇とんでくる葦下り

芭蕉傑句を書く 1

短夜の笹の葉きつてあかしけり  
消炭にのみの子とまるあつさかな

「小坂んぼとんぼとねぼとつてみな」

ほげとうに赤らとんぼほとまらんか

あれかいなあれ舟 鮎やが

そつとして、あれ鮎がまたういてきた

北枝ならは— 取君に 2

いたづらな歌かき永き日をたてな  
みぢか夜も心とどめてわかれける

植村鷹千代に 1

みぢか夜を線香にきてあかさばや

# 萬葉地圖 (其一)

攝津

阿胡浦 (住吉浦)  
二五五、二五七、三六〇

萩松原 (今ノ安立町ノ辺)  
六五

浅香浦 (住吉浦ニ同ジカ或ハノ南野孫)  
二二一

淡澤小野 (住吉神社南方ノ)  
小澤ヲ浅澤トイフ)

有馬山 (有馬温泉附近ノ山、取ハ橋邊)  
一三六一

有馬  
ヨリ有馬ノ方見ル山  
四六〇、一一四〇

味經原 (今三島郡味吉村ヨリ小松)  
二七五七  
大道、西中島村ニ至ル野)

味經宮 (豊崎宮、難夜宮、長)  
九二八  
兩宮、川辺宮ニ同ジ?)

葦原 (今アシヤ)  
一〇六二

上小竹葉野 (不詳、摂津(古卷)  
豊崎町下ニ在ル、今大阪府西淀川区)

(大阪府全志)

猪名野 (兵庫縣川辺、大阪府)  
二六五二

## 索引 (國家大観)

八長歌  
△八切書其他

嶺 丘 取 太 郎

豊能西郡猪名川ノ西岸)  
二七九、一一四〇

猪名川  
三八〇四

猪名山 (不詳、猪名川ノ水原山脈?)  
三七〇八

猪名榮 (猪名川ノマリヤ港、  
今ノ神崎ナラン)

出見次 (住吉浦)  
二二九

菟原 (郡名、今兵庫縣武庫郡ニ入ル)  
二二七四  
二八〇、二八二、二八九、二八〇、四三二

得名津 (住吉三浦)

二八三  
大伴三津、御津(堀江ノ江口  
ニマリシナラン難波津)

六五八、五八五、八九四、八九五、二五二、  
三五七、三五五、三五九、三七一、  
大和田次(今ノ御津、敏馬浦)

一〇六七、  
河辺宮(味經宮)  
△二二八、△四三四  
笠縫島(不詳、東成巴原江古義)

近江(私見)  
二七二  
四極(磯齒津、住吉津ナラン)  
九九九、

四極山(不詳、吳坂(古義)  
近江? (私見)  
二七二

三〇七六  
住吉  
六五九、三九四、九三、九三三、△九九九

一〇〇、一〇〇、一〇四、二四六、二四七、二四八、  
二四九、二五〇、二五八、二五九、二七三、二七五、  
一八六、二四四、二七五、三九七、三九七、三八〇、  
三六八、四四三、四四五、四四八、四四五七、

住吉粉浜(住吉次)  
九九七、  
住吉御津  
△二四五

須磨  
四三三、九四七、三九三三  
摂津(国名、津の國)  
△四三三、△五七七、△二四〇、

高津(古難波津)  
二七二

二九三  
高津宮(仁徳天皇ノ都、今ノ  
大阪城ノ辺)

卷二、難波高麗宮御宇天武代  
垂水(豊能郡豊塔村、兵庫縣  
、垂水ニアラズ)

一四二、二四八、三〇二  
角松原(今西宮市外津門)  
二七九、二八九九、  
都賀野(神戸市夢野)

津の國  
四三三  
遠里小野(住吉ノ南方、今住  
吉区遠里小野)

難波  
一五六、三九九

三二二、△三三六、△四八四、五七七、六九  
二四八、二四二、△一七四七、△一七五一、二六五、  
二八九、四四五、△四四六、四三九、四三六、四三六、  
難波海

難波海  
一七二六、三三二、四三三五  
九七七、四三六一  
難波の國(攝津ニ非ズ、難波地方)

難波門  
四三八、  
難波道  
難波津(大伴ノ御津)  
八九六、四三三〇、四三三三、四三三六、  
四三五五、四四〇八

難波濟  
△九〇、

難波宮(孝徳以後桓武ニ至ル難波  
ノ都、長柄宮、味經宮、御恩宮)  
△六四、△六六、△三三二、△九二八、九三三、  
△九九七、一六二、二〇六、二四四、五六、四六〇、  
△四四五七

奈吳次(住吉次)  
二五三、二五、四七  
長柄宮(難波宮)  
九二八  
難波小江  
三三八六

名次山(西宮市外廣田神社背後ノ岡)  
二七九  
姫島(難波八十島ノ一)  
△二二八、二二八、△四三四

堀江(今ノ天満川ナラン)  
二四三、二三五、三〇三、三七七、四〇五、  
四〇五、四〇六、四三六、四三六、四三六、  
四三九、四四〇、四四一、四四一、

真野(神戸市尻池ノ辺)  
二八、二八、二七二、三三二、  
真野浦(日所海岸)  
四九〇、

三津(難波津、大伴御津)  
九三三、三三三、三三七、三七二、  
三津崎(難波津ノ港端)  
二四九、二四五三

敏馬(神戸市西灘味泥)  
二五〇、三九九、△四四九、四四九、九四六、  
一〇六五、一〇六六、三六三、  
三島江(三島郡溝沓、三箇  
取付ノ辺、突川ノ込水)



- 三宮 二六六、二八三、二八六
- 武庫海 二五六、三六〇、九
- 武庫湖 二五八、三五七、三五九、五
- 武庫泊 (西宮市外津門) 二八三
- 武庫川 二八三
- 武庫波 (武庫川ノ濱場) 二八三
- 河内 二八五
- 伊駒山 (大和ノ境、草香山?) 二〇七、三〇三、三〇五、三五九、三九〇、四三六
- 大坂 (今竹ノ峠、当麻超、大和、高田ヨリ河内磯長ノ越エル道) 二〇七、三〇三、三〇五、三五九、三九〇、四三六
- 息長川 (平野川ノ枝ノ郷ヲ流ル際名) 二八五
- 葛木山 (葛城山ノ脈ノ總称) 四四八
- 河内 (国名) 五〇九
- 河内大橋 (大和川ニ架セラレタ橋、今ノ近明寺村ノ辺) 三二六、四四五、七
- 河内大橋 (大和川ニ架セラレタ橋、今ノ近明寺村ノ辺) 三二六、四四五、七
- 河内離宮 (弓耐離宮?) 四一七、四二
- 片足羽川 (中河内郡堅上ノ下村ノ大和川ノ異名) 四四五、七
- 草香江 (河内中部ノ巨浸) 一七四、二
- 草香山 (伊駒山) 五七五
- 伎人郷 (今摂津、大阪市東区区喜連) 一四三、八
- 神樂良野 (不詳、天上ノ野ノ古義) 四四五、七
- 立田山 龍田山 (大和竜田ヨリ河内竹原井ニコユル峠) 三二六、四四五、七
- 竹原井 (中河内郡堅下村高井) 一七四、二

- 田、推古天皇ノ行宮アリ 四一五
- 直超 (生駒超) 九七七
- 二上山 (尼上山) 一六五、一九八、二八五、一六六、八
- 和泉 一六五、一九八、二八五、一六六、八
- 高師浜 (今泉郡遊歩町高石ノ海岸) 一六五、一九八、二八五、一六六、八
- 血沼 (和泉ノ古名) 一八〇、九、一八二、四三二、一
- 血沼海 (和泉灘) 一八〇、九、一八二、四三二、一
- 取石池 (泉北郡取石村) 二一六、六
- 吹飯浜 (泉南郡深日、或ハ紀伊) 三二〇、一

### 編輯後記

この雑誌よりさきに出る答の、夜友会誌「十号」に、私は雑誌部委員のいひついで、「炊火短歌会志」といふのを書きました。締切に全く接近してゐたため、殆んど三三人の諸君に見ていただくことしか出来なかつたことから、多くの諸君の意に満たぬ点かならうかと恐れます。寛恕を御願ひすお次第です。

X 私の似無慈悲に就て「似無慈悲」のことを私にいつた人がありました。それがどこに出たかわからずしてゐたのですが、木川竜之介の「雁生門」の扉にもある、「君看取眼色、不語似無慈悲」だったのです。この詩を見たと私は、昔の芸術家の大勇猛心につねに感服します。たゞ遺憾です。かういふ感傷「私の」は彌助の出世を待つ様な感傷です。(F)

X 三崎作「巻下」の第三首、左の如く改めます。

ひかりすす、くものゆききは、早しとみなながら、ちからなきわが眼おとふも、照もてる身の。(T)







か  
こ  
ろ  
ひ

九  
号

昭5年12月 (高3)

# 火 炫

第 九 號

その一  
山越へて 海渡るとも おもしろき  
今城の内は 忘らゆまじに

その二  
みなどの うしはのくだり うなくだ  
り うしろもくれに おきてかゆかむ

その三  
うつくしき あが稚き子を おきてか  
ゆかむ (紀) —— 扉の訓讀 ——

昭 和 五 年 十 二 月



炫 火 第 九 號

— 目 次 —

|           |                  |      |
|-----------|------------------|------|
| 嶺丘 耿太郎    | 山茶花と目白           | (1)  |
| 湯原 冬美     | 啼ろしき理知           | (2)  |
| 大東 猛吉     | 幼き頃の友の病にあるを聞いて四首 | (4)  |
| 津田 清      | 雲のあかい夜空の幻想 及び    | (5)  |
| 北能 梨人     | 相聞戯作抄            | (10) |
| 厚見 莊吉     | 續都會主情派           | (11) |
| 山内 しげる    | 驛のうらそと           | (13) |
| 佐伯 信夫     | 牛その他             | (15) |
| 鹿園 炫火     | 頌歌               | (16) |
| 津田 清      | 漸香集 (鈔)          | (17) |
| 湯原 冬美     | 玫瑰花冠花園           | (19) |
| にぎわしき龍舫新航 |                  | (21) |
| 正美        | た、かひ其の他          | (23) |
| 編 後 記     |                  | (24) |

山 茶 花 と 目 白

嶺 丘 耿 太 郎

夕映えの光うつせる池中に動かぬ水あり何かさびしも  
 タグさて雑木林に鳥落ちぬ紅葉の色は褪せずかもあらむ  
 山腹の植木畑に山茶花咲き日光ぬくとし人來ぬひるを  
 標原の影をうつせる大池に午過ぎの雲過ぎにけるかも  
 霞の濠の堤のどんぐりを採りためにけり少年こひしも  
 どんぐりのみのもる日來れば海ばたの弟の墓もこひしまるかも  
 ×盟休破りの翌る日―に

刑務所の白ふに落ちし陽のいろの赤かりしこといつか忘れむ  
 陽の後に青葉畑にある餘暎緑のいろの鮮しと言はむ  
 ×Mの病重し

増 田 正 元

山茶花咲きつゆじもぬかきこのごろを細りしからだ耐ゆると思へや  
 全快の暁を語れる友の顔に死相深ければわれら背けり

北山の星の光の鋭き夜を病院の坂下りけるかも

廢園「炫火」頌歌

夫れおもしろに観ずれば人おのおのに調べあり  
 湯原の感傷 三崎の凄絶 大東の清梵 鋭二の敏 厚見の慷慨 北能の  
 可憐 佐波の官能  
 いろとりどりにこのましく例へば破毀れし長崎の南蛮寺の園生たる花の  
 色香にこそ叙たり  
 茉莉 石竹 百合 含羞草 紅天竺牡丹 忽忘草は云ばずもあれ昔の花  
 の紫羅槿花 あらせいと  
 縁へて云へば限りなしなほおのおのに欠点あり 例へて云へば茉莉の花  
 午のさかりは洞み果てゆくかたまけて咲く力を 昔の花のあらせいと  
 う 今は聖教とともどもに知る人もなきその句ひ  
 石鏡同秋太郎賦に誦す 深く首愈し給はざらむ

怖ろしき理知

湯原冬美

とく草の古のさわりのほのしろさ自叙のはなしにうみにけるとき  
 ほろほろと小鳥は啼きぬたまゆらの黄色の毒草枯れにけるかも  
 山峡の雑名の寺のひるにはにむらちりし毒草の花(ニ上山附近)  
 さびしさを思ひてきたる野の果も草やくにはひ流れてありぬ  
 くさ原を人む水されてゆくときは何ともなきにかたしくなりぬ  
 よき友は學校おはれ離りにけりねどこで我はふはりん讀みつゝ  
 天國はゆたかなところと思ひぬぬ葛のみみちはくさりだしけり  
 赤土の丘のまん中に道つけよ美しき少年が一人くるため  
 さ、ママの岩さりひらき家建てぬまことうれしき人間のちから  
 大廣間へ我と猫とがあゆみよりまなこひらさてにらまんとする



とほしみに生くりんと見ゆ蜂のい とうりはたと思へは死にてけるかも  
 まなことうればたらまぢきこゆ冬のあせ生のちから<sup>は</sup>かなしいものぬ  
 うすぐらきみ麻子の中にまなこすえ危る<sup>ほ</sup>いすはなつあしかりき(野中寺)  
 うつけつゝ君をおもへは青白き<sup>し</sup>柑子の皮をむきてゐたれり(Nに―)  
 まよふかの巻<sup>ま</sup>とはるとき人の聲ひそひそきこえさもしくなりぬ  
 やえいぶめんど凍傷の<sup>あ</sup>血流ししもつきの町を忘然とゆく  
 本をならべパンを焼さしもさてさてこれから何をしやうと思ひしなるか  
 煙とんでまぢに冬くろいたでの血ほとほと寒くにじみ流れるぞ  
 いてて乾いたぐらうんばにほ―をころんで僕のいたでは血を流す  
 ぶりき職人けふ二人して家へくる霜月の<sup>は</sup>齒痛  
 次つがつともくふ男と並んでけだものめいたさもしさあるぞ  
 海<sup>あ</sup>此岸に哲學の砂塔<sup>た</sup>作りたりその塔<sup>た</sup>にのほり童子笛ふく(大東雄吉―藝術の優位)  
 しぐれふるしもつきのまぢ歸るよさりは春盡かく男のなんとなく百つかし  
 見ぬときもしづこころなく花はちり人生<sup>あ</sup>れぬ世より幾万年を経し

玫瑰花冠の花園

湯原冬美

(蝸居料房おうらいしゆ鈔の二)

秋ぐみほみのつてゐるか山路きたもの  
 山ゆりはしづき<sup>あ</sup>屏のまじりきりす

*Ein romantischer und sentimentalischer  
 Rom* のために ― 秋君にさげる一句

無花果も夜ぶけて白きあまのかは

少病似無病<sup>あ</sup>師暮寒<sup>あ</sup> M. W. に

宇陀川の<sup>あ</sup>天魚煮る夜<sup>あ</sup>のうすさむす

秋の雨ふる 3

茶づけ食ひつゝ、人死んだ噂きく

万両は袷裏に赤しけさのあめ  
 らちもなく夕ぐれとなる秋の雨

星野の山守のことばに 2

下・子ごぬ月夜まむしいさみしいま  
 お月兎のいわしのすはなれにけり  
 月天心夜ふけのまぢに泉する

秋まつりとんばつりにも出でばやな  
 自殺した友を悼み 2

みんなして泣いた日もあつたものを  
 わんわんと泣いて列についてゆく

ふじい寺 2

みちのくの音きりんこの句かな

庭の穴を拾つて土の<sup>し</sup>わりかなしき



野も山も雨ふるまへのうす明り  
信木山

楠の木は近しあさのつき  
和州本一だいちゆん

楠の木に入日のこれる在所がな  
寒き夜のもとうといもうと

汁こ煮ゆるまたすみんを眠つてしまつたな  
しぐるるや竹の葉おちし昔の花

そこはかと一もとはなれすたれ  
しぐれ過ぎすのこの匂ひしまらくと

かそやかさこすもす寝めて境のうち  
うるし木はしみぢさしたる寺の夜

玫瑰花冠の花園

(鴨居艸房百うらひゆ 鈔の三)

春はまづ聖瑪利亞の鐘のころ

すしう草とりつ、行けば日しくれて  
蝸牛をさなごころにもあはれ

さみだれを思はずなりぬこひし鳥  
影多き真夏の林行かばやな

わねと我眉毛に重きあつまかな  
かそけけれど葉もくけぶり消しし得ず

ゆく秋や塚のまぢのついで門  
しぐるるや音してきれし琴のいと

かや原のしぐれは近し移の色  
朝鮮もしぐれふるかや夕ぐれ

ふるすとを霜夜の鐘のき、ごころ  
寒菊は叔母と一緒にいけにけり

山路ゆけたごひとつばも夏の色  
みぢか夜を練香たきてあかさばや

にぎわしき龍舫新蟻

このみちをなきつゝわれの行きしことわか  
忘れなば誰か知るらむ (嶺丘歌太郎)

われわれはまづ一番おしほひの人間なのだ  
らふ。絵を描いて生成の理に満足するなぞ

といふ事はもう蘇るだらふ。しかし昔はこ  
れで助かつて来たのさ。戦乱は続くし、家

に現れてゐる賢人学者に遭ふわけにもゆか  
ない。そこで雲や竹と対ひあつて習練する  
処世術を古人は考へたのだ。(大養健南水六月茶)

古心を得たら古語を語りませう (佐藤春夫)

何物消向味 詩多枕上成 却將詩宗枕、枕  
又寂無声 (趙既北)

現実のロマンチーレンから現実のリアリス  
チックな把握へ。(津田清)

われらは新鮮である。人間的なる内的生活  
を欲求する。すさびもよい、頤唐もよい。

しかもわれらは窮極に於て芭蕉のいふ道草  
に徹する概をもつ。すてにそれは絶体境で  
ある。(「炫火」発行のことば)

咏嘆や、感傷や、豪傲の如く新しき詩人に  
とつてはたゞに教養として詩から放棄して



おられるこの古代的な宝石に、その青春の  
紅血を感じ、又この古き悲哀の時代のすま  
ざまの思ひ出にとぎすまされた光澤に、生  
活市場からのがれる、なにとはなきデリケ  
ートな眼ざしを味つたのである。(松火短歌  
会誌)

八

勿論誰もこの古代の白金の調べある古琴を  
音楽堂の脚光の下に、充分な自負と、満足  
と、充実に於て立たせようとは豫期せねば  
それはあまりにもいたいたしいこと、考へ  
た。(全)

九

だわけたる歌作るゆえにうやうにその韻の  
ほど細りけらずや。(湯原冬美)

十

俳諧の益は俗語を正す也、常に物をおろそ

かにすべからず。(芭蕉「三冊子」、但し校及  
会誌十号「芭蕉雑俎」参照)

十一

文学は文学少年の仕事である。(ランボオ)

十二

封建的定型短歌が、枯渇してこそ居れ未だ  
社会の片隅に依然として(反動的役割を果  
しながら)棲息してゐる事實に対し、それ  
との闘争を必然に課せられてゐる限りに於  
いて、それはなほ一の短歌運動としての意  
味を有するものだ。(短歌前衛、十月号「終刊  
の辞なき新誌『プロレタリア短歌』創刊の豫告」)

十三

「潮音」で知らぬは貞一ばかりなり(由比  
正道・註、貞一は水穂本名、又川柳に「町内を知らぬ  
は亭主ばかりなり」)

か  
こ  
ろ  
ひ

九  
号

昭5年12月 (高3)



# 火 炫

第 九 號

その一  
山越へて 海渡るとも おもしろき  
今城の内は 忘らゆまじに

その二  
みなどの うしはのくだり うなくだ  
り うしろもくれに おきてかゆかむ

その三  
うつくしき あが稚き子を おきてか  
ゆかむ (紀) —— 扉の訓讀 ——

昭 和 五 年 十 二 月

炫 火 第 九 號

— 目 次 —

|           |                  |      |
|-----------|------------------|------|
| 嶺丘 歌太郎    | 山茶花と目白           | (1)  |
| 湯原 冬美     | 啼ろしき理知           | (2)  |
| 大東 猛吉     | 幼き頃の友の病にあるを聞いて四首 | (4)  |
| 津田 清      | 雲のあかい夜空の幻想 及び    | (5)  |
| 北能 梨人     | 相聞戯作抄            | (10) |
| 厚見 莊吉     | 續都會主情派           | (11) |
| 山内 しげる    | 驛のうらそと           | (13) |
| 佐伯 信夫     | 牛その他             | (15) |
| 鹿園 炫火     | 頌歌               | (16) |
| 津田 清      | 漸香集 (鈔)          | (17) |
| 湯原 冬美     | 玫瑰花冠花園           | (18) |
| にぎわしき龍舫新航 |                  | (21) |
| 正美        | た、かひ其の他          | (23) |
| 編 後 記     |                  | (24) |

山 茶 花 と 目 白

嶺 丘 歌 太 郎

夕映えの光うつせる池中に動かぬ水あり何かさびしも  
 タグさて雑木林に鳥落ちぬ紅葉の色は褪せずかもあらむ  
 山腹の植木畑に山茶花咲き日光ぬくとし人來ぬひるを  
 標原の影をうつせる大池に午過ぎの雲過ぎにけるかも  
 霞の濠の堤のどんぐりを採りためにけり少年こひしも  
 どんぐりのみのる日來れば海ばたの弟の墓もこひしまろかも  
 ×盟休破りの翌る日―に

刑務所の白ふに落ちし陽のいろの赤かりしこといつか忘れむ  
 陽の後に青葉畑にある餘暎緑のいろの鮮しと言はむ  
 ×Mの病重し

増 田 正 元

山茶花咲きつゆじもぬかきこのごろを細りしからだ耐ゆると思へや  
 全快の暁を語れる友の顔に死相深ければわれら背けり

北山の星の光の鋭き夜を病院の坂下りけるかも



廢園「炫火」頌歌

夫れおもしろに観ずれば人おのおのに調べあり  
 湯原の感傷 三崎の妻籠 大東の清梵 鋭二の敏 厚見の懐慨 北龍の  
 可憐 佐波の官能  
 いろとりどりにこのましく例へば破毀れし長崎の南蛮寺の園生たる花の  
 色香にこそ叙たり  
 茉莉 石竹 百合 含羞草 紅天竺牡丹 忽忘草は云ばずもあれ昔の花  
 の紫羅槿花 あらせいと  
 縁へて云へば限りなしなほおのおのに欠点あり 例へて云へば茉莉の花  
 午のさかりは洞み果てゆくかたまけて咲く力を 昔の花のあらせいと  
 う 今は聖教とともどもに知る人もなきその句ひ  
 石鏡同秋太郎賦に誦す 深く首愈し給はざらむ

怖ろしき理知

湯原冬美

とく草の古のさわりのほのしろさ自叙のはなしにうみにけるとき  
 ほろほろと小鳥は啼きぬたまゆらの黄色の毒草枯れにけるかも  
 山峡の雑名の寺のひるにはにむらちりし毒草の花(ニ上山附近)  
 さびしさを思ひてきたる野の果も草やくにはひ流れてありぬ  
 くさ原を人む水されてゆくときは何ともなきにかたしくなりぬ  
 よき友は學校おはれ離りにけりねどこで我はふはりん讀みつゝ  
 天國はゆたかなところと思ひぬぬ葛のもみぢはくさりだしけり  
 赤土の丘のまん中に道つけよ美しき少年が一人くるため  
 さ、ママの岩さりひらき家建てぬまことうれしき人間のちから  
 大廣間へ我と猫とがあゆみよりまなこひらさてにうまんとする

とほしみに生くりんと見ゆ蜂のい どうりはたと思へは死にてけるかも  
 まなことうればたらまぢきこゆ冬のあせ生のちからはかなしいものぬ  
 うすぐらきみ麻子の中にまなこすえ危る佛いすはなつあしかりき(野中寺)  
 うつけつゝ君をおもへは青白き柑子の皮をむきてゐたれり(Nに―)  
 まよふかの巻とほるとき人の聲ひそひそきこえさもしくなりぬ  
 やえいぶめんど凍傷の血流ししもつきの町を忘然とゆく  
 本をならべパンを焼さしもさてさてこれから何をしやうと思ひしなるか  
 煙とんでまぢに冬くろいたでの血ほとほと寒くにじみ流れるぞ  
 いてて乾いたぐらうんばにほ―をころんで僕のいたでは血を流す  
 ぶりき職人けふ二人して家へくる霜月の齒痛  
 次つがつともくふ男と並んでけだものめいたさもしさあるぞ  
 海此岸に哲學の砂塔作りたりその塔にのほり童子笛ふく(大東雄吉―藝術の優位)  
 しぐれふるしもつきのまぢ歸るよさりは春盡かく男のなんとなく百つかし  
 見ぬときもしづこころなく花はちり人生れぬ世より幾万年を経し

玫瑰花冠の花園

湯原冬美

(蝸居料房おうらいしゆ鈔の二)

秋ぐみほみのつてゐるか山路きたもの  
 山ゆりはしづき屏のまじりきりす

*Ein romantischer und sentimentalischer  
 Rom für die Liebe* — 秋君にさげる一句

無花果も夜ぶけて白きあまのかは

少病似無病師暮寒 11. 12. 12

宇陀川の天魚煮る夜のうちすむす

秋の雨ふる 3

茶づけ食ひつゝ人死んだ噂きく

万両は袷裏に赤しけさのあめ  
 らちもなく夕ぐれとなる秋の雨

星野の山守のことばに 2

下・子ごぬ月夜まひしいさみしいま  
 お月兎のいわしのすはなれにけり  
 月天心夜ふけのまぢに泉する  
 秋まつりとんばつりにも出でばやな

自殺した友を悼み 2

みんなして泣いた日もあつたものを  
 わんわんと泣いて列についてゆく

ふじい寺 2

みちのくの音きりんこの句かな  
 庭の穴を拾つて土のしりりかなしき



野も山も雨ふるまへのうす明り  
信木山

楠の木は近しあさのつき  
和州本一だいちゆん

楠の木に入日のこれる在所がな  
寒き夜のもとうといもうと

汁こ煮ゆるまたすみんを眠つてしまつたな  
しぐるるや竹の葉おちし昔の花

そこはかと一もとはなれすたれ  
しぐれ過ぎすのこの匂ひしまらくと

かそやかさこすもす寝めて境のうち  
うるし木はしみぢさしたる寺の夜

玫瑰花冠の花園

(鴨居艸房百うらひゆ 鈔の三)

春はまづ聖瑪利亞の鐘のころ

すしう草とりつ、行けば日しくれて  
蝸牛をさなごころにもあはれ

さみだれを思はずなりぬこひれ鳥  
影多き真夏の林行かばやな

わねと我眉毛に重きあつまかな  
かそけけれど葉もくけぶり消しし得ず

ゆく秋や塚のまぢのついで門  
しぐるるや音してきれし琴の色

かや原のしぐれは近し杉の色  
朝鮮もしぐれふるかや夕ぐれ

ふるすとを霜夜の鐘のき、ごころ  
寒菊は叔母と一緒にいけにけり

輪の枝のきべにとく寒さかな (三二五元年作)

山路ゆけたごひとつはも夏の色  
みぢか夜を練香たきてあかさばや

にぎわしき龍舫新蟻

このみちをなきつゝわれの行きしことわか  
忘れなば誰か知るらむ (嶺丘歌太郎)

われわれはまづ一番おしほひの人間なのだ  
らふ。絵を描いて生成の理に満足するなぞ

といふ事はもう蘇るだらふ。しかし昔はこ  
れで助かつて来たのさ。戦乱は続くし、家

に現れてゐる賢人学者に遭ふわけにもゆか  
ない。そこで雲や竹と対ひあつて習練する

処世術を古人は考へたのだ。(大養健南水六月茶)

古心を得たら古語を語りませう(佐藤春夫)

何物消向味 詩多枕上成 却將詩宗枕、枕  
又寂無声 (趙既北)

現実のロマンチーレンから現実のリアリス  
チックな把握へ。(津田清)

われらは新鮮である。人間的なる内的生活  
を欲求する。すさびもよい、頤唐もよい、

しかもわれらは窮極に於て芭蕉のいふ道草  
に徹する概をもつ。すてにそれは絶体境で

ある。「炫火」発刊のことば)

咏嘆や、感傷や、豪傲の如く新しい詩人に  
とつてはたゞに教養として詩から放棄して

おられるこの古代的な宝石に、その青春の  
紅血を感じ、又この古き悲哀の時代のすま  
ざまの思ひ出にとぎすまされた光澤に、生  
活市場からのがれる、なにとはなきデリケ  
ートな眼ざしを味つたのである。(松火短歌  
会誌)

八

勿論誰もこの古代の白金の調べある古琴を  
音楽堂の脚光の下に、充分な自負と、満足  
と、充実に於て立たせようとは豫期せねば  
それはあまりにもいたしいこと、考へ  
た。(全)

九

だわけたる歌作るゆえにうやうにその韻の  
ほど細りけらずや。(湯原冬美)

十

俳諧の益は俗語を正す也、常に物をおろそ

かにすべからず。(芭蕉「三冊子」、但し校及  
会誌十号「芭蕉雑俎」参照)

十一

文学は文学少年の仕事である。(ランボオ)

十二

封建的定型短歌が、枯渇してこそ居れ未だ  
社会の片隅に依然として(反動的役割を果  
しながら)棲息してゐる事實に対し、それ  
との闘争を必然に課せられてゐる限りに於  
いて、それはなほ一の短歌運動としての意  
味を有するものだ。(短歌前衛、十月号「終刊  
の辞なき新誌『プロレタリア短歌』創刊の豫告」)

十三

「潮音」で知らぬは貞一ばかりなり(由比  
正道・註、貞一は水穂本名、又川柳に「町内ご知らぬ  
は亭主ばかりなり」)



昭6年1月(高?)



# 炫火

第十号

かきろひ色 陽餘 春の日はきらきらと霞  
 の如く立ちて見ゆるもの。かげろふ。いと  
 ゆふ。古語。  
 かきろひ色 蜻蛉 動物 虫の名。とんぼ  
 におなじ  
 かきろひの(発) 陽餘 陽餘は多く春の空に見  
 ゆるものなるより。はるにかけないふ。又  
 この語のものは。きらめく火影といふ意な  
 り。もゆるに。かけていふ。ほのかに。かけて  
 いふ。又。目に。ふる。ものなるより。ひと  
 めに。かけていふ。又。夕日は。時に。かけ  
 のきらめくものなるより。ゆふさきりくれば  
 にかけていふ。又。石の火の如く。かつが  
 つ見ゆるものなるより。いは。かけていふ  
 (ことばのいづみ)

昭和六年一月

## 炫火 第十号 目次

|              |            |                 |              |
|--------------|------------|-----------------|--------------|
| 伯            | 湯原冬美 (1)   | 短歌はじこへゆく?       | 湯原冬美 (60)    |
| 海砂賦集鈔 玻璃海賦集鈔 | 嶺丘歌太郎 (5)  | ワークナーの樂劇        | 二            |
| 南窓集鈔         | 津田 清 (10)  | 「ベルンゲンの指環」      | と            |
| 雪片と混血兒と河と    | 詠          | ニ (14)          | パイロイトの祝劇について |
| えいたん         | ○西川英夫 (14) | 方               | 向            |
| 亡き從姉に捧げ      | 詩 (三年)     |                 |              |
| まつる 其他       | 藤島すみを (20) | ものかをしき河草集(古風な味) | 津田 清 (123)   |
| かれくす集 其他     | 山内しげる (22) | 春露集鈔            | 津田 清 (124)   |
| 六年集          | 佐波曼沙矢 (27) | 「炫火」挽歌 及び       | 津田 清 (127)   |
| リアリスム        |            | 万葉地圖その二(アト)     | 嶺丘歌太郎 (132)  |
| 續々藝術的世界観覽書   | 大東猛 吉 (30) | 「炫火」自創刊号至第十号迄目次 | (135) (137)  |
| 愛と藝術と        | 沖崎猷之介 (41) | 編輯後記            |              |



怕

湯原冬美

一 夜さびのレエル

凍てた車輪うごきくる徐行レエル區も凍つて般減すべし  
 凍りさつた火花の發射残しゆく夜さびのレエル釘ゆるんで音たてるらし  
 こつんこつん靴でた、けは反撥するこれは凍つてゐる凍つてゐるに違はん  
 いやはてに朝ぐればレエルは氷と融け杭木は石灰の如く般びゆくべし  
 レエルの下に女死んでゐるとよるひるに語りだす寒さの氣違ひら  
 眼も鼻も判らぬ女まこになつて死んだ姿が眼のまへにくる  
 くさ花の野原の中に朽ちるよりレエルの上にも暴ぜ、なんと冬の好まし  
 冬の日はレエルはいて、しまつたねトントンと足でふんごみる

二 冬の日

氷はつて暗渠わたりつ、寒風のつよい忘却がはじまり出す

零下四度のバルコンに藤椅子をだして台階雲でふいませう

海の上にあられふつてゐる日がくれる「小供の喧嘩は家でしろ！」

ちっほけなニッポン人と思ひつ、行く藪ふるまちなかゆえ

ニッポンのことなつかしくなればホク霞ふるまちもいとほんとせず

いくつもの雲空にあれどこのまちの煙とびゆくが寒さをかりる

凍てた風ホクを吹きとばしきつとなり小説をかこう

雪の下に顕花植物の芽はあらんホクはもち石す感冒の観

三 現実の断面

ソビエットスタイルのネクタイはまっ白の道をけふ買ひにゆく

この道はネクタイの家たちならべひとりぼっちでホクの行く

まちの道はぬかるみなれど萬國旗見ゆれば暖さが上空に入

東京へ行かうと思ふが東京で何をしようつまらぬ歌も此

きよつとすゝる刺戟あれは東京がよし帝都のまちをいま

ホクの眼確涙がスに犯されなば袖のにはひでも思ひだ

冬そらのソビエツト大快館の赤き旗若き女も泪流しおらん

四 C H O S E N へいつ下友のこと

テウセンにゆけばビールのんで別れた君が生きてゐる生きてゐる  
うす夜のやみに月見草が咲いてゐたねキミがちびつたね

月見草をとりながらホクは生ぬくかつたビイルのおくびをついたな  
小さい恋愛を相談した池の堤はいつからホクらぶはりんを結つたか

眠つくと時雨の如くに氣動けばじつと耐へつゝ、餓腹食ひたし(君のいふフクは)

五 ストライキ宣言

ビルディングあるペイブメントの煙突のかけらストライキ宣言!

寢室に萬國地圖か、げ夜はみるいつの日赤く深り盡すべし

中國ソビエツトの移動のあと旗をピンヅけし日本の聲もきこえる

ボタイホに赤旗高けれど海遠し四つばひになり涙を落す

シグナルの灯変ること多ければ工場に人の聲いま高まる

指令でる教増しストライキ終るかハンカーストの絶叫襲ふ

肉身で守りてこし統制本部組合旗ちぎりて今閉鎖さる

キミら帰れ指令讀む委員長を守れピストルとりて闇にかくれる

鰯食ひつゝ、幾日すぎしシグナルの灯変るはまことに今日なり

ストライキ終るゝ工場町にさわさわとビラとびゆく

組合旗飾りて鰯食つた日の機械の音はせず眞実冬をり

六 夜更の裏街

むしろの家で子供が猫と寒がつており凍痛が道で動き出すなり

夜ふけはサibelに多くゆき當り眼かちの老婆犬とねてゐる

反射炉の火今宵も赤けれどわれら立たばたちまち消ゆべし

雪くれど土につもらずほそぼその暗渠の上に犬を追ひやる

鉄筋の骨ぼろくと釘落ちて一夜のうち地上に亡びん

がつがつに君と僕とが争へどこのまゝの世界で何となると思ふ

いろいろに理窟いふこととつばらよしつまり小鳥と心中しろ



海砂賦集鈔

嶺 丘 耿 太 郎

その一 ぼくの死 (十二月)

楡いんばらの木の高にれの木のむら木立死にて坐ますは誰が佛かも  
ゆうぎりの海うみおそふころなれば海去ゆく兄せをばとめむものかな

その二 蒼首鴨

首蒼あはき鴨の羽色夕光りひかり消えなば眠りに入るか  
鴨の羽うの光澤ひかりかゞやき向岸遊べる様をたのしむ

その三 時 走

シクラメンの咲くころとなりうらがなし知り合ひの人誰か病みぬき  
じんよりと空動かざる街にあてもの乞ひの心われは思へり

その四 元日と雪 (一月)

さむしうや野道はるかにはいと行きて小川をわたるいまひそやかに

鐵橋に電車か、れば青淵に雪ふりこみて消えてゆく見ゆ。

その五 大和國

さむざむと遠峯ろひかるひるすきを溢れしといふ川わたるかも。  
三輪山の尾の岡の谷や榎の木のもとに佛を拵置てまつる。  
石佛二尊のみせば自ら見比べてゐるかしくけれども。

石佛に昔むす見ればはうぼうに造りし人もなつかしきかな。

昔水のつたふをき、し庵居のしづけさおもふもの云はぬまは

その六、街のろまんちしむ

一 市街戦

十八の若さのゆえに拳銃をもちて巷にけふも出にける。

いのちと死と未だ思はぬ掌の中の銃の冷さにおの、かれぬる。

いのち愛しいのちおしければ、街に出て拳銃買ひぬいのちなぐさに。

二 海港の星

日のくればなかなか來ない時計塔の硝子の中に誰かうごいてる。

方々の時計塔だけ日がのこるその瞬間はかなしいものを。

山々の冷さを身にしみこましふらんすの旗下すを見てる。

海いつぱいに腹赤き船うかびなて煙吐く見れば戦ひ思ほゆ。

海波のくらきを見てはおそれにきさほどさびしくてわれはるにけり。

冬海はうしほにほはずひた流るいろくずどもねむりふかけれ。

きんきんと十字架高くひびかして、約翰教會に日は落りにけり。

いつまでもこんくりいと、の林あるにつれなく寒く日はうごきけり。

べうべうと日本の笛吹きならしゆかば笑はむ碧眼の子らかなし。

三 コンラッドフアイト

啞啞と啼く鴉に石を投げうてよともの眼をつ、かむとする。

死屍は日に日にくされゆくらしも戦果つる日はいつならむ。

わがこゝろ深くおそる、しかなれど必ず生きじ占屋に見えたり。

よるふけてどよみしだいにせまりくる眠れぬよるは早やも明けかし。

馬車の音最後にきこえ風來る沼地の鳥はひとこゑ鳴きし。

月出でぬよるのふかさよ地の果をひそびそとゆくわれがいのちは。

遂遂と枯木に風は吹き去にぬやがていのちの時到らむず。



玻璃海賊集鈔

嶺 丘 耿 太 郎

その一 空

輕氣球あがれる空のすみいろにもののかよひは目に見えくるも、  
輕氣球の繫索されよおくふかき空のまん中に食ひ入るがため。

その二 空

春空のあんじうのだの星こひし魚族もねむる冬空のもじ。  
太陽のてる裏側に星ら来てこよひの雲にかくされにける。

その三 空

聖樂は空に消え果て夜いたりぬ白猫走り眼にふれにけり。  
その四 空

ぼんやりとものおしうごく春空はげんげの花を咲かしめにけり、

その五 海

棧橋の下を泳げる魚らの斑は水面にいつぱいになる。

その六 海

地圖なれば太平洋は青かりけり赤き航路に眼をおしあてぬ。

その七 海

港町の十字街はかなしひるすきは波立てる海せまりくるかな、  
白波をふきあげる海へゆくみちにきつとびとるふしぎでならぬ。

その八 ふるさと

故里に夏雨立てば松原に自分は食はぬ茸採りけり。  
葺壇の山菜子もらうたこと恥ぢて柘榴咲く家に晝中かへらず。  
夕されば山梔子の花匂ひ咲く蛙の類青く光り出る。  
爬虫類の卵を孵すきみわるさくちなはならば何んとしようぞ。

# 短歌はどこへゆく？

湯原冬美

■ — 怖ろしき理知及び「Capitales (コキト)」について —

旧歌論の虚妄の排撃、詩(ホエジイ)と現実、詩の立場、新しい歌の道、歌人の態度、新しい短歌はどこへゆく、等についての覺と書

芸術の問題で口をさく二つの型がある。奇席の作家と大学教授。二つとも大して異ならない。山向ふの莊嚴は火災を批評してゐる有象無象共！ 百千の大学教授は「エテを讀め上げた。彼らに解るからだ。芸術でなくて理窟が。だが理窟は——流行語を云へば理論は永劫に芸術でない。そしてフアウストは八分は芸術でない。科学が芸術に助力を求めること、科学者の墮落であつても、芸術にとつてはちよつとぐすつたいと云ふだけだ。大学教授は莊嚴の地位の爲めに「エテをこねまはす。そして芸術家は類をセむけてぐすつたがつておたらしい。『キングダム』と「エテが同居するを」を吾々は不思議とせぬ。只大学教授は學說の莊嚴さへ？)の爲ちよつと肩をよせて、しなき作るだらう。だがその教授のノオトが淫賣屋の二階で徹夜するといつたものだ。これと対蹠的とも一つの型が時々口をさく。元氣よく「思想もバケツも……」。するとこゝへ新奇な學者達が登場する。芸術とは？ それら解釈學だ。現象學だ。人間とは？ (けたものでない)。それから芸術は？ とゆくのだ。「存在の問題」へまで。

ところが「芸術とは一体何だい？」「うん、おれはバカのことさ」。とこの市井の会話の方が大学教授の莊嚴は神聖なテオリより一面の論理を含まぬのだ！  
私らは音楽会を見る。油で光らせた髪の下劣な青年と睡意を令嬢。堂内では金貨の音がし。採取の汗が器具からにじむ。彼らは暗途で音楽を滔々と弁じる。けれども諸君驚く



必要はない。それは「音楽世界」の反射者に過ぎない。田舎者である私らは「音楽」を羨望する。だが今日あんなものが芸術だつたり芸術家だつたりたまらない。

だが安心しろ。本当の芸術家はいつも「棍棒」を持つてゐるんだ。芸術家は破壊者なんだ。「この爪はボロになる迄何べんも読んでくれ」。これが芸術家の態度であり宣言なんだ。文學はこの努力をする。ところで文學は芸術中での田舎者なのだ。(文學の芸術は)然し田舎者は尤も理智的で素朴で重厚で普遍性が多い。しかし「何べんも」といふとき、文學は音楽や造型芸術より悪い地位に立つんだ。が文學は古今の大作でも一冊で本棚へ立てかける。「史料日記」は二十巻だ。(古本は勅定に入らん)

私が「短歌とは何であるか」と批評を書く。此は他人がしてくれろ方がいゝ。しかし歌壇はどんな所か。そこにある「年より」共は「芸術とは何か？」さへ知らない。考へない。永年の修業でとうにか三十一文字に並べられろ。文法と常識を五百年八百年以前の歌びと歌の尸文を知つてゐるばかりに。「詩人の眼」などでんで問題でなく、澤さんの皮膚よりガサガサの感情を、荷の様な言葉にこねあげて、「歌で候」と、納つてゐる石ころ共なんだ。私らは改造社版「日本文學全集短歌篇」を見る。アララギ全集など悪口はどうてもよい。しかしわれわれは芸術のために(一)あの中から七八人を除いて他を抹殺する方法を考えてくれ。七八人て？ 利玄、茂吉……まだ少しある。だがそれらも過去の短歌とし

ては短歌に今日の芸術を興へることは、私らが、やるかやらぬかは別として今日の問題なのだ。

そこで詩の問題がくる。併し此を多言することはない。たゞ一言超現実主義はポエジイの正態でない。中野重治にはレアリテの情操、橋本英吉には重圧、武田麟太郎には構成、北川冬彦の意志の苦悩、塚原祐の線遡。並にわれわれは今日のポエジイを見る。横光利一。この天才的作家にはポエジイが缺如している。と思はれる。その証拠は？ ジヤコブを読んだか。「ランボオは宝石屋の飾だ。それは詩でない……」大体ポエジイは読者の状態だ。だからといつて人々は「批評の不可能」といふ例の古風な「切り札」をのぞかせることはいらん。「愛したる印象批評」をこれで結構！ だがそれは「とりかへり」でだ。「この作は表現はまづい。しかし煽情的効果をもつ……」こんな馬鹿げた、話があるか！

すると「批評の一敵性」といふ奴がくる。「レエニン——と人は云ふ——こいつは芸術上で一般人の常識だ。併し此でよい。つまり舌の向敵だ。食通の舌もルンペンの名も共に健康な食慾を知らずい。

ところが「偉大なレエニンも、つまり芸術論でなく政治論だ。美意識はすべて「政治論」だつた。カントもリッパスもフイドルもオオゾブレヒトもガイゲルも。「芸術家の美



辱しはわれわれの新芸術の獲得だ。それは「職業の秘密」だ。美学から芸術は生れない。トリストイの芸術論は立場の証明であるが、何故ペンから芸術が出来るかの論述でない。多かれ少かれ首は神秘主義者だつた。

芸術家がアップの「理論」に従へないとする。反対になれば「反動」だ。「裏切り」だ。ところが反動はありうる。即ち極点で芸術家が、芸術を放棄するか（自殺か）といふところまで個人に於て問題は進展し得る。断つてなく私に「公式主義者」を問題にせぬ。

問題を一つ拾ひ上げる。新しい芸術がプロレタリアの口あきりよくすることは半分の墮落だ。マルクシズムより「諸級社会」が彼らに於て多くの読者をもつとする。それだといつてマルクシズムを「キング風」に解釈するバカはない！

文字といふハンデキマツプがある。次に芸術といふ、さらに小説といふ、詩、短歌といふ。読者を考へる。すると「プロ短歌」例から「現実の情勢」と「実践の勝利」がとび出す。けれどもそれは算盤がけで工場と農村とを歩みはつてからにした方が手とり早い。「面白いこと」は文学の第一の魅力なのだ。そして「高踏的」といふ概念はとうてい消せない。

芸術にこびりついた世人の一般概念なのだ。云ふ迄もなく芸術家も立場に立たねばならない。具体的に云へば資本家の側に立つか。労働者のバリケードに身をかくかだ。何！水を越越する立場！そんな便宜な立場は歌人

のねごとの、頭の中以外に世の中にあるものか。現実を「肯定」した秀れた芸術家はどこにもなかつた。（人は藤村の「若菜集」の序を見よ。こいつなら誰にも公平だらう。詩人藤村は「歌ひ上げ」凡愚の追従者は「歌ひ下げた」。「芸術」反抗は「今日」の芸術家のABCだ。

「芸術家と実践家とどちらがえらいか」この少年雑誌風な器々さ水の大問題に笑つて答へよう。聖徳太子、フロボトキン、レエニン、傳説の素戔嗚命、所謂革命家、と云ふ芸術家は人類のもつ二つの光輝だ。革命家の自傳と芸術の書を読ませぬ所は牢獄と学校だけだ。今日の芸術家は読ませぬ文学をか！それでい、マルクスを切れたハイネ、海を越したゾラ、芸術はそれ故といつて行動の下にた、ない！只芸術家の「純情」だ。そして芸術家はこゝろあらねばならない。

云はんでもい、ことだが、芸術は純粋な科学以前であり、それから科学の以後だ。解せない奴は、すつ小指を噛んでみる。血が流れたら義理の筆を弄してやらあ。

「何故芸術するの？」の問題がくる。「感情の移入」てか？つまらぬ問題をこつて尋ねに云ふから科学者や哲学者を喰ふのだ。私らは「芸術者生論」を「芸術家の美学」から不同の部分として削る。今日の美学は芸術家の活動のガイドの問題を扱ふ。只これだけいっただけい、。俺らは傑作を見たう真似だけでもしたくなる。否！ガンと作品で抗議する







作家の階級的立場——そのいつれの側に立つか、は最早良心の問題である。しかも芸術家の良心の問題である。

何の気もなしに書く男がない限り、詩人は「眼」と「頭」が入同となる。ところでこの理智的傾向はますます増加す。併し「眼と頭」入同と云つても、すぐに宣告して手に入る品ではない。そこで素質が問題だ。旧歌人を一刻も容謝せず、最も残忍に清算せよ。短歌の爲に！

「文学は傑作への抗議だ」(ヘコクトオ)と、ヘランボオのことを書きつづけるといふ。文学は文学少年の仕事だ。それであつていふ。それ故に文学だ。文学は古人の切實でない。日本の哲学者や科学者と少しちがふ。左派各人は藍水の全異でもない。文学者の全書を読むのだ。彼らが如何にして芸術を失つていったか？ それは暗然とならざるを得ぬ事だ。だがそれは裏がへすと新しい芸術の獲得といふ怖ろしい事だである。

古い短歌に私が今全部線をひく。このことは革命の悲劇だ。然し私は革命を怖れてはいけぬ。フランスマルク政治で殺されたものはカールライルの計算で四千人を出ぬと聞いた。ところで当時の王政国では如何に無味な人命が殺されたかを各人は学校の歴史の時間に聞かない。又一九〇四年十二月某日旅順東方の岩石中に浪費された日本軍の将卒の血が幾人だつたかをも比較すまい。

女人しけ無学でもその癡症の中で、希伯来語や希臘語を話したそうだ。これが詩人の仕事と同じなのか。私は睡眠中、夢の中で俳句や時に漢詩の一句を作ることがある。これも「肉眼」を聞いた詩人の仕事の中へ入るのか。

私は「短歌は咏嘆の……」とよく云ふ。それは咏嘆即短歌といふのではない。素材として、外在の條件の如何にして文学に先行するかを云ふのだ。されば私も「さげひの抽象」と書いた。(炫火発刊の詩)。煙草一服もすってぬらぬない！ そんな咏嘆が直ちに芸術ではない。小便と芸術とはどちらが重大かと云ふバカげた論証も、こゝに空襲を見つけたのだ。狂歌すると小便をこらへる力は芸術にないから、といふ前提がくる。

「煙草を一服して行き換へる」といふ一九二八年頃迄の旧詩學(？)に、茲にうやうやしく時代的花環をさしける。

つまり亦もポエジの向題となる。同時に反映する主体たる現象及び作家の立場——意識に於て——が、何故に又如何なるポエジーが正しいか。「中野重治と堀辰雄と、北川冬彦と竹中聖と、いづれのポエジーが正しく、健康であるか」。この問題は主として科学——文芸の、経済の、政治の——が決定する。そこで科学が芸術に先行する。しかし科学はそれだけである。創造は芸術がする。世界観の尤も高次なるものは芸術である。



この比較はH・G・ウェルズがちやんとした。マラーが殺すには文明のため「殺す」情熱があつた。バルザック(恐怖時代の一挿話)は割引がいて、この反動的センチメンタルの立場を私らは避けねばならない。此は余談に似て余談でない。ともかく抹殺は悲劇だ。ところで此は哀理に伴ふ「悲劇性」なのだ。彼らは嘗て、そして今も尚私らの教師である。しかし抹殺は個人の課題でない。文学の進歩だ。「わがコムソモールの机の上には共產主義ABCの下にエセーニンの小さい詩の本が横つてゐる」と書かれたプハリンの意味深い言葉は、たゞ革命的インテリゲンチヤ(單にソビエトロシアの)の気持だけではない。如何に野蠻に踏み越すか、こゝに進展がある。文学はランボオの表現を代りると「地獄」であり、そして文学少年の「原罪」なのだ。像を左にひくか右にひくか又その結果、それらは当然後世の文豪に任せていゝ。現在のだつて悪くはない。けれども当然彼らは私らと同輩であらねばならん。

私らは口語短歌理論を排斥する。「ことば」は「詩」の道具である。大前提たる「ポエジー論」なくして、何の「ことば」のへんべんたる問題ぞ。しかし、日本を「ニッポン」と云へなくて「ひのもと」と云はねばならぬ。この「歌よみ常識」には赤面を感じる。

新しい歌は、新しい「形式をもつ」。詩人は「制御」する。こゝで口語、文語、形式、非形式の問題は解消す。詩人は「現実」である。こゝに口語、文語、型式、非型式の問題

は了解す。

まづ「理智」が問題として了解され、次に「特異性」がくる。この「特異性」こそ「文学の普遍性」となる。すると、「君は一人に千度読まれるのと、千人に一度読まれるのとどちらを好むか？」と例の大問題がおしかける。「文学の神様」は、「千人に千度」と云ふそうだが、文学は落語の様にゆくまい。落語だつて、千人が千度聞くまいし、千人が千人同じ方向角から感心するのではない。

こゝへ又そう、「計数」「計算」といふ新文学の常識がくる。「伏字で効果があつた」といふのは私らのまけ惜しみだ。私らはその暗はげしく憤つた。然し私はいふ、かげん倦んだから、早く終へゆく。

さて「Cognitive」の主張は何に向ひつ、あるが、私らは今新しい「現実の短歌」に導くサークルを合謀力で駆けてゐる。浪漫派象徴派の巨人らは砂上に崩壊した。ロマンチイックが「感情の無限性」から墜落して、近代象徴派に終焉したとき、「詩はどこへゆく」。こゝで私らは政治論でなく文学論から超現実派の *Occultism* を問題にしてゐる。こゝでこの「たつたの落し子」——このことばを味ひべし——は私らからは神秘でも神話でも何でもない。出所は明らかだ。ロマンチズム以前であり、その増幅を極めた科学的(?)唯物的(この矛盾!)扮装にある。そして正統詩はマツスを発見した。こゝこそ宮廷



や管舎マラクビーのマッスでない。プロレタリア。その階級である。しかるにプロ短歌——当然正統の嫡子たるべき彼は計算で誤算を歴然と犯した。それは芸術上の誤算である。然し誰もこれを問題としなかった。

万葉の後に古今の運動があり、新古今あつて明星が誕生した。そして古典様倣狂赤彦のアララギズムは文学運動を暗轉させた。初めの自然主義を失つて、千年の首へ追。新芸術の墮落である。今や私は文学運動のサークルを正さんとする。「明星」の短歌運動に帰れ。(作品へではない)と云つて帰つて了つては駄目だ。回顧する。旧短歌作者は之れをリレーでない云ふ。短歌といふ棒が渡されたか。どうかといつてまわぐ。「××語録」の発明者にもいひをつける位私は子供ではない。かゝる自叙的論法を私はあはれんで看過する。(少し云つておく。この先生は芭蕉が如何に海彼文字を関心したかを知らない。この人の芭蕉を読んでみる。誰でも唯然とする)ところで誰もそれがどんな棒か。どんな色かとは云はない。夫が形だけ云つた。「三十一文字だー」。どうもそうらしい。ところがこの形は、年より夫が何げなく見た。けだつたため、あやふやとなつてきた。「三十一文字に近いものだ。そんな気がする」。とともかくも若い奴にわたしてたまふものか。そこで文献学的發見論、文法論、何々卿の歌論と初めた手はあんまり旧くさい。昔の大名は歌は作れぬが格式から作らねばならぬ。そこで墨のつぎ方、短冊の書き方、筆の吟味と

發明したがこの方が殿様らしくて馬鹿に頭がいい。處で私らは驚かない。安心しろ棒はちやんと私らがもつてゐた。そのうち明かにするんだ。

短歌といふものを分けて見ると今迄の短歌は大体「写生」といふ學者にとりつかれたものと、「回想」に腰這入り込まれたもの、「幻想」を素通りしたもの、三つとなる。「写生」とは云ふまでもなく支那人の發明だ。「亂れはつく……賢者にあえない、竹や石に向つて生計の理とした」こうして生れた理論だ。赤彦が萬葉の恋歌に此にこじつけた。「厚かましさを敬遠して、石川雅望翁のカリカチュアでも靈前にさげようと私は思ふ。アララギでも茂吉はちと種が異なる。僕らは皆茂吉を愛して来た。確かに昔の茂吉は芸術をもつてゐた。ニヒリスト茂吉は今日では文学史の問題だ。それにしても茂吉が教師だつたら「アララギ」も、もう少し成長した。らう。「幻想」とは、左様、諸君の考へる通り。但し形而上とか哲學とかもこゝへはいる。おしまひに「回想」がある。こいつの根づよまは、風流で、東洋の神秘で、嘆きである。ところで私らは「吟嘆」をもつとなく見てゐる。「はげしい感情」と書き換へても手同だけだが、どうにか気がすむ。ところでこゝにまゝ一つ、一番短歌の中で継子扱ひにされた型がよくみるとある。「さけび」「叫喚」「聲き」といふべきものだ。然し、少し歌の發生を考へた人間ならず、これが歌の始原だと気がつくのだ。こいつは初め素朴だった。今でも尤も感動的だ。純真だ。「××ノ命」の時代



から歌は「くどくもの」より「わめくしもの」だった。今日のプロ短歌はこの奥で血系だと  
いつていゝ。有難くなくても。こゝへ又「歌の進歩」など物言がつくだらう。しかし早す  
ざる。「物尺は？」と私は頤門に一針を呈す。ところで私らの叫喚は、騒音は？ それ  
は街頭だ、工場だ、自動車だ、ピストルだ、首だ、屠殺者だ、颯風の破壊が身辺にあり。  
レンガの窓の中にある。家の中や、野原から見ておるのとわけがちがふ。肥満した四肢の  
代りに血みどろだ。爆弾や火薬だ。蛙にしても茂吉の蛙とは生水がちがふ。とにかく「グ  
イナミックなものへの偏愛」は新しい形式へつれてゆく。さてブルトンの「非合法主義  
者、超現実主義者への宣言」でシユールレアリズムは？ 要するに、文学者のアキレス履  
の秘密。

ところで、こゝにプロ短歌同盟は三〇年版十月発行の機関誌「短歌前衛」に宣言を発表  
した。今それによりと短歌を短歌運動への道程であり、短歌運動は政策的の名稱に過ぎな  
いと云ふにある。短歌形式を、又芸術の一ジャンルとしての短歌形式を認めるか否かは「  
公式」と「發生的推理論」で決定されない。詩人は要するに、形式の「社創」と共に「制  
制」にある。文学形式としての短歌或は「短歌的なるもの」を放棄するか否かは一途に「  
詩人の実態」の問題である。

「新散文詩運動」に呼應する「口語短歌運動」——ポエジイを基礎とする——はこ

こに於て、プロ短歌の「素材」と「短詩」を一通り正統とする。しかも、それは歌人の一  
つの武蔵であり、それにより、歌人は「野郎」のである。天下り式おしつけてはなない。  
芸術は世界全体を把握する。こゝに科学以上なる基盤がある。新しい来るべき社会に於  
ても、かゝる「詩」の理論は、たゞ「詩」を進展せしめるために書かるべきである。私  
は短歌の「方法論」をたくんでない。それは謙讓り詩人の秘密に属させる方が好ましい。そ  
して詩人は「作品」を、「力」を振げつけるがいい。

新しい短歌の機能は、如何に高次に吾々の魂をうちぬくか、如何に速く迄破壊の光を  
射透すか、にあるんだ。方向の二つ。芸術の剃刀と爆弾だ。そして吾々はドヤシつける力  
を愛する。それは階級社会に於てでもである。

旧い短歌の七重の一つに「童心」がある。旧いむかし、短歌の芸術論は「童心」を唯一  
の詩人の資格と考へた。新しい理智とイデオロギイの短歌はそれを打破する。靜かに社会  
を考へずに生長してくれば、われわれは誰でも「童心」を保持し得よう。こゝに階級社会  
の欺瞞の巧妙な策略を見よ。個性を尊重するためには、われわれは先づ、かゝるものゝ保護を  
水者成さぬない階級社会を処分せねばならぬ。今日の社会に於て、二十になつて、三十に  
なつて「童心」をもつが如きことは詩人の恥辱と感ぜるところに芸術の「力」が初まる。  
感傷的児童の感情とは異なる。



日本ではジャンルとしての韻文詩は短歌。若しくは「短歌十三」である。形式の美も、短歌又は「短歌なるもの」或ひは「短歌的なるもの十二」で表はされよう。そこで詩人が日本語の詩人である限り、又、日本語の「助辞」と「動詞」活用の美と詩と感情を同心する以上、一度は短歌を向題とせねばならない。短歌から、又は短歌への二つの方向によつて。

私は烏帽子を着ない。大宮人さへも、水干をつけない。首長らと海に漁りをしない。灯き日常はマナ的警威とせぬ。神佛を畏れない。君主らを人向だ——否、祖先は互に隣人だつたと知つてゐる。こゝに新しい短歌が起る素地がある。家の外へ出れば労働者の團結と闘争にぶつかると。学校へ警官が侵入して生徒をつれ去る。そこで「現実」を見る。こゝに新しい「短歌」がおこる生地が色づけされる。——良心によつて。五百年、千年前の歌論が出来て、それで歌の先生だとは、そうさせた奴がバカなのだ。本当の「短歌」を、関心するものはまづ、奴らを結社から、ひきだして彼らの、素質の検査から初めるんだ！

で私らはどんな形式で表現するか。古い定型は完成された芸術の形式である。私らがそれを倣ふことは横倣だ。模倣か若しくは駁算だ。ところで私ら芸術を愛するのだ。芸術は駁算の請負の切責でない。

石走る重水の上の早蕨の萌えいづる春とタリにけるかも

高槻の梢にありて頼白のさへづる春となりけるかも

(萬葉集)  
(鳥水赤茂)

これは典型的な模倣だ。そこに何ら現代人の芸術であらねばならぬものがない。勿論諸々の感情の中には、妥当する感情がある。ところで芸術は、妥当感情の表現でない。藝術は、現実の関心から成立する。孝行の情でも、忠孝共に併立しなかつた時世(重盛)もあれば、松陰の時代の親子の愛もあるし、今日我々にある非合法党の人々の内親愛もある。孝は妥当する感情である。ところで今日までの階級社会は、この尤も美しい感情を矛盾の位置に置いた。そこに芸術の働くところがある。即ち芸術は親子愛といふ永久的な感情を仔細に記述するのでない。そんなことは修身の先生にたのめ。時代によつて如何に愛が正義と矛盾したかを感情の方面から組織しゆくのが芸術の仕事である。この故に芸術は現実であり、「万古不易」の道は茲にない。故に今日の芸術の立場は現実の尤も正しい「眼」で事象を組織するので。

そこで形式は？、といへば私らの形式は現実の中に自己を透すのだ。現実の中に自己を見つけないとする、安逸な定型ではない。強者への共感だ。最も強い主観である。私は形式をさほど詩人の同題とせぬ。「スタイルは出発になることは出来る。それは結果として現はれる」(コクトオ)これを短歌にあてはめるがいい。何となれば詩人は「創造者」であり、



「制御者」であるからだ。形式に於て詩人が「職業の秘訣」をぶちまけることは、殊に短歌に於ては早急にするよりもさきに短歌の概念規定が必要だ。これは当然私も論せねばならぬ問題だ。茲ではたゞ語の活用と助辞のもつ統一性の短詩にあらはれるものと云つておかり。内的粘着性である。助辞と活用之美しさに短歌は初まる。そして当然今日の短歌は「口語」にゆく。

二十代の吾々が今、此の詩業で何十年になした轉回を短歌に試みる位置にある。吾々は多忙を祝福せよ。

ところで吾々は今轉形期の歌人であるといふ事実に直面する。政治論に屈服するか、芸術を固持するか、之は講義の標に容易に一致する生やさしい問題でない。然して芸術する以上芸術が一着となる。故に吾々は「芸術に政治的価値はなんものはない」(中野重治)の論証を自分のために読んでやらねばならぬ。

「短歌はどこへゆく？」とこの論文を結びあげねばならぬ。私の文章は簡潔すぎて、一人よがりであるかも知れない。しかし私のいたのは、旧歌人の虚妄の歌論の「排斥」と新しい短歌の「詩」と「現実」と、歌人の「態度」につきまゝ。それは現実に自己を徹することだ。たゞこの論文(？)は多くの問題を、各章ごとにおいてけぼりに、どばしていった急に價值があるだらう。「短歌滅亡論」？——ところで「存在」せぬところの

「滅亡」があるものか。この問題は詩の点から問題となる。一人よがりの思ひ上りは止めろ！ (一九三〇・一・四)

(後記) この論文は一晩で書いたもので、おそろくドグマが多いかも知れません。しかし、おちおちの雑誌にのせるのですから、後で皆で訂正して下さい。多分僕と反対の方が多いいのですから、どんく攻撃して下さい。何かの方法で誤りは訂正します。しかし大体の主張はこんなものです。「Cage」といったのは決してフルサークルをつぐなどといふは「墮落的」行為ばかりでなく、このことばが「短歌」の概念にふさはしいからです。それに少し新鮮にもひびきます。僕は勿論フッサールについて、此と云つて知つてゐるわけでありません。もう少し鋭ニや猛吉にきけば、えらさうに書けたのですが、何と云つても時間がありませんでした。それからこの論文は各章で別々にわけて番号をつけるといいのです。特にアラライズムの排撃は後日に残しました。

「烽火」九号で試みた「怖ろしき理智」の大半の形式とこの「コギト」及び十号の「怕」は並進的のつもりです。以上自家廣告します。

詩 (三年)

わがスペインから

湯原冬美

DON 何がしさま、バルコンは今宵零下四十九度にムリます。一体この寒暖計は本當でございませうか。もしもし獨牛師諸君、君の赤い帽子はちよこんと曲つてゐる。まさか貴方は黨員でございませうまい。ハッハッハッこれは笑ふべき話でムいます。DON 何がしさま。(一九三九、五、X)

戦争について (B)

寒い夜、記憶の底に俺は白魚を見つけた。こゝでは海なりが陸の中にムく。ふるさとの墓地の沈丁花の匂、その女、檸檬の女を思ふ白魚、その記憶から今日の白書に白魚をおもふ。鈍重の情緒の不可逆の力、少女を犯すことは、あゝ俺は戦地の感傷に墜落したんだ。虚けられた感情は

蝶死すべきであらう。マルクスを感ぜることの不幸がよぼよぼの橋を生命の飛躍におく。死。否。否。(一九三九、八、X)

業

a Kantaro Yumeoka

業、肋と肋との向から刻してゆく。將軍參の刃の隈取。北方の風は、けさは血腥い風土を運んできた。(一九三九、一、X)

未 末

戦争は終るであらうか。巴里市廳の使丁が私を拘へた。左様。左様。隻手隻腕に例へプラチナの義足をつけて何としよう。私はこの千年昔の支那人の言葉を回想して使丁にKの詩の句を示したのである。—— 賜語をぶら下げた巨大な頭は粉碎しなければならぬ。(一九三九、一、X)



小年期

箱丘歌太郎に

私は指で金魚をにぎり殺して、水盤が一杯に溢れば死んで行かねばならない。

私は不幸な小供であつた。私の母は私に「おまへは父にも私にも似てぬない」と語りしかせた。私はそれを二十になつて未だおほえてゐた。譬若は私の處方箋を書くと出かけた。私はその中におそろしいドイツ文字を見つけた。不安に、あいつは俺を殺すのだ。私は何匹の金魚を殺したことだらうか。それに今私は殺されねばならない。私のために掘られた赤壇の墓穴は、もう一丈五尺以上ですが、といてきてゐるではないか。ふと私はその中から暖い温泉がわいて来ぬであらうかと考へた。一日の炎天の後にこれは又なんといふ豪雨がきたことか (一九三二、一、X)

# 萬葉地圖

その二 (ノート)

- I 南和地方
- II 奈良地方
- III 吉野宮邊
- IV 三輪山

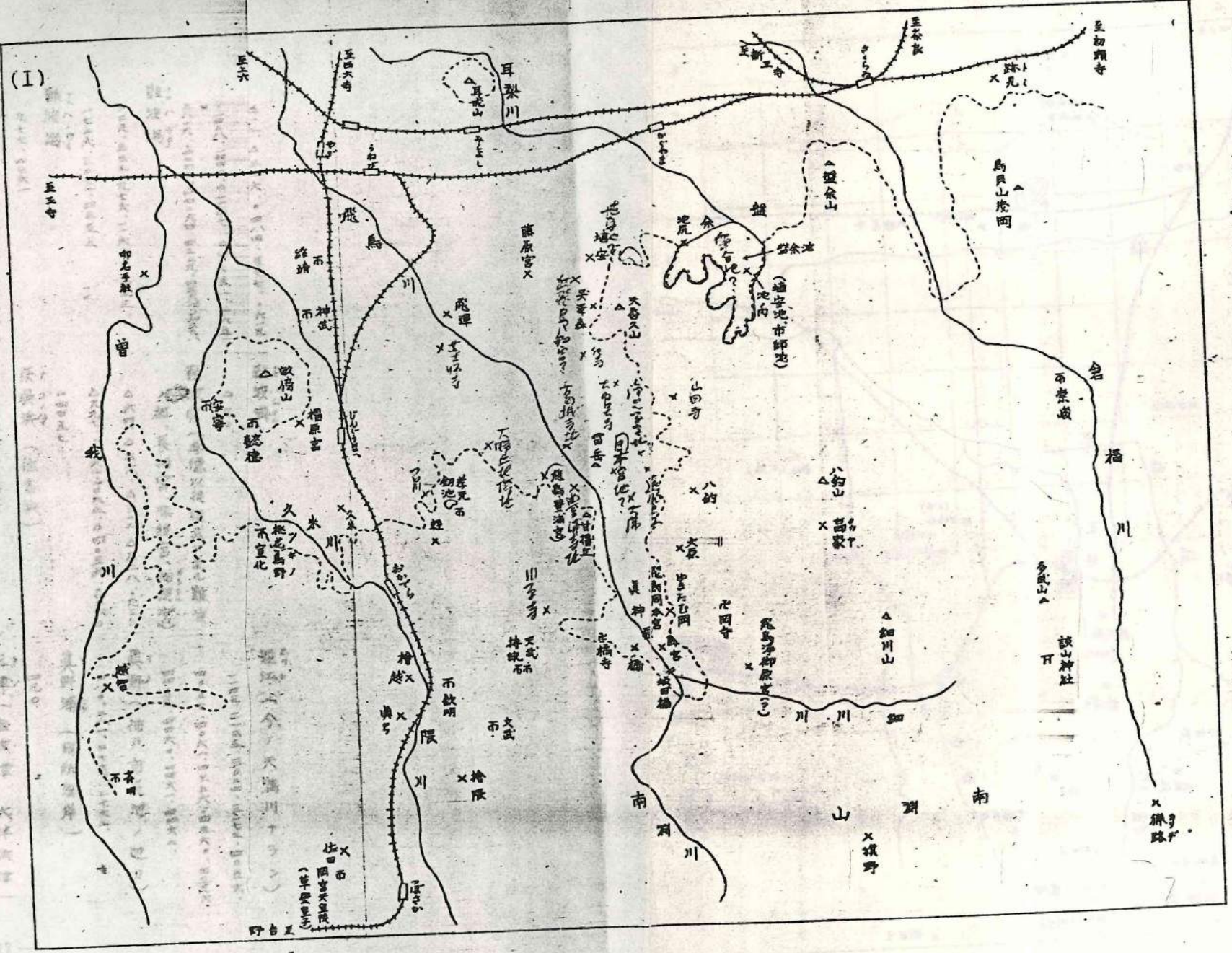
「事は勿論である。」新しき俳句はそこに生れねばならぬ。「季」不要論は既に芥川竜之介氏がなへてゐる。もはやえは今問題でない。既に「俳句前衛」及び「旗」其他「歌」湯原君が書くであらう。僕らはひそかにそれを期待してゐる。

新興俳壇よりこれと主観的傾向をのぞき去つて後に何がのこるだらうか。問題はこのにある。新しき短歌形式、俳句形式については、

埴安地は現今全く酒場してゐますが香久山の北西麓一帯を覆つてゐたもの、やうです。磐余池の一名としたのは吉田東伍氏によりました。

この外にも大和の万葉の名所は多いのですが全国を書くひまがなかつたので、  
 参考書 辰巳利文、大和万葉地理研究、吉田東伍、大日本地名大辞典、万葉集全訳、  
 鴻巣盛廣、万葉集新釈、豊田八十代、奈良時代史論、中等歴史地図





萬葉地圖(その二)

嶺丘耿太郎







### ◎編輯後記

僕達の最後の第十号がこれほど賑かなものになるとは思はなかつた。僕達のあそびも大した事になつたと思ふ。物いふあしよりあつまりはこれから何うなるであらうか。此のうみはまことにひろしの曠を抱きつ、さあ別れの杯を

(歌)

曲りなりにも十冊を続刊してみるとホッとした気持ちになる。昔私等の秀れた先輩らが校内から発行した文学の雑誌に比しても私らのこの雑誌が決して其の形の貧弱さなどは

問題でなく、歌壇的な価値が見える目がある。自負してゐる。私達が創刊号を初めた頃から旧歌壇は根柢からぐらつきたした。それはプロ短歌の決定的な功績である。そして今では芸術短歌といふお化けが出現した。私らは独得な道を進めてきた。かゝる点は短歌の門外漢には見わけがつかぬであらうが、それはどうであらうか。それはどうであらうか。私の立場——短歌に

ついての——「校友會誌」九号に會誌を書いたときは大きい変化を試みた。(本号評論「短歌はどこへ行く?」を見よ)私はプロ短歌の文学の誤謬

を論及した。私はそのために「反動」の烙印を恐れる。故に私はこゝで一言。私は今日の所謂プロ短歌を感心せぬといふ。つまり作品の問題である。

x

「煽動」の意味に於ても私は某々君等と意見を異にする。よい作品でなくしてどうして「煽動」があらうか。文学の「煽動」は素材の「煽動」でない。そこには感情の組織者としての文学技巧の優位がある!

x

「学校に於て、客観的情勢に應ずる」低位論のごとき誤謬で



ある。かゝる誤謬の代りに他  
の方法がある。

x

「焔火」は多くの秀れた作品  
を残した。これは僕が大声で  
いふ、「焔火」は多くの駄目な作  
品を残した。此は小声でいふ  
これは會の性質から仕方ない  
「秀れた」とは勿論日本の今日の  
歌壇からいふのである。

x

学校内の仕事として私等の  
「焔火」は賞められてよからう。  
環人のことを今になつてとや  
かく残念がる人々よ、なぜ生  
存中に支持してくれなかつた  
か。だがあの作品と財政的支

持ては倒れる必然性がある。  
但し環人は表面上体利中た  
これも云つておく。

x

「焔火」は決して学芸部のも  
のでない。学芸部から出る  
金は短歌會への補助で、「焔  
火」は補助を得る前に六冊も  
出して来た。此も忘れて  
くれ。それから佐々木恒清  
先生と短歌會との関係は「指  
導を仰ぐ」と會則にある。先  
生のごめいわくにならぬ様  
に書いておく。

x

僕等が編輯を止めても二  
年の入々がやつてくれよう。

初めから「焔火」は詩歌の雑誌であ  
る。文学の雑誌である。「焔火」は  
何等當局の干渉を受けた歴史が  
ない。今後如何なる方向に「焔火」  
が進むにしても、(そういふ事は  
當然だ)若し「焔火」の発行を赫々  
権力に対しては、我々は、又我  
々の先輩は共に極力之を抗争す  
ることを断言する。

x

校友會誌に代るものとして「焔  
火」をとりたて、ゆけ、新しい諸  
君に期する。ともかく十冊に  
せば校内では注意されよう。

十号はこの大部である。まづ  
顔ぶれを見てくれ。校内でこれ

以上は難いだらう。それから  
私は満身傷だらけの校友會誌  
十一号と比較して欲しい。こ  
れでいふ、苦しい財政の下で  
やつてきた耐はある。ハイデ  
ガを芸術の見解に底辺とした  
大東の教回に巨る論文の如き  
この国の學術雑誌の標準から  
でも相應の高さに評價されよ  
う。それに対する批判として  
の沖崎の論文もさらにある作  
品でない。下々の詩篇、横江  
津田の短歌の如き……最早  
候らは餘りにも謙讓である必  
要はない。

x

津田君の君の論文に対

x

x

し「然り而して否」と答へよ  
う。新しい「発行の録」！ 全  
く然り、そしてそれは、「焔  
火」の中途以降作品の上のそ  
の努力でなかつたか。津田が  
この論文を書き、あの短歌を  
書く、書かぬばならぬか。(書  
かぬ時は考へてゐるだらう。  
そして考へばどつかて現れる)  
これは釋形期の切実な個人  
の同題だ。僕に於ても。

本書の題字も伊藤君に  
書いてもらひました。

(冬)

昭和六年一月二十五日印刷  
昭和六年一月三十日發行  
(非賣品)

編輯兼 大阪高等學校  
發行者 焔火短歌會

大阪天王寺東門南  
印刷所 フリント社  
電話五三三三番



一  
つ  
さ  
ら  
ひ

故佐々木青葉村先生追悼編

第十三号



# 火 弦

号之十第

世にすねて山に一月寺ごもりある夜ひ  
そかに劍抜きて見る  
山添ひの桃咲く小村緋桃咲く藪かげの  
家に吾は生れし  
雲いろいろ秋の夕をアンゼラス鐘の音  
遠く水渡り来る  
繪草紙屋の店頭に蛇の目の傘をうらぶ春  
の夕の妓の美しき  
春の宵霜索堂の階を降り来る僧の姿美  
し（火一ニ號より）

佐々木青葉村

昭 和 七 年 二 月

炫火 第十三號 目次

|                 |        |    |
|-----------------|--------|----|
| 憶佐々木青葉村         | 宮田和一郎  | 四  |
| 佐々木恒清先生のこと      | 湯原冬美   | 五  |
| 佐々木先生のことども      | 津田清    | 一五 |
| 佐々木先生のことども      | 山田しげる  | 二一 |
| 謹んで佐々木恒清先生を憶ひ奉る | 大東猛吉   | 二六 |
| 佐々木先生を想ふ        | 藤島きみ子  | 二九 |
| 佐々木青葉村先生哀悼句四章   | 田中克己   | 三〇 |
| 冬 眠             | 沖崎猷之介  | 三一 |
| 佐々木先生送葬の歌一首並に反歌 | 山村修一郎  | 三二 |
| 佐々木教授をしのぶ       | のまふんきち | 三三 |
| 西北の歌抄           | 山村修一郎  | 三四 |

佐々木恒清先生のこと

湯原冬美

あの事件の新聞記事は「東京朝日」には大きくは出てゐなかつた。それだが私はいつか  
 の様に眼をさまして新聞を開いた時に第一に眼についたのだつた。私はわけもなく考へる  
 こともわからずにいそいで大學へいった。それで起きるのが遅いせいでもう晝食の時間  
 になつてゐた。どうしても私は新聞記事のまゝで事實を事實として信じることは不安であ  
 り又一層不幸であつた。そして私は圖書館のあらゆる新聞に眼を通した。私は一層大きい  
 活字での上寫真までついてゐる新聞記事の前に立つよりしようをかつた。集つてきた大  
 高出身者は話し合つた結果明日の大阪の新聞を持って確めようと申し合せた。財津先生が  
 まく予られて間をいだつた。圖書館に集つた私らはだんだんよい先生からなくなつてゆく  
 のか、と嘆息してゐる人はかりだつた。この思ひ出を書いてゐる私はその後にも小方教授  
 の赴をさかされた。文科の私等にとつては殆んど聲咳に接する機会をもたなかつたにもか  
 へはらず、やはり私等は匂ひなく燥慮を感じた。こんなことを書くことはいけな



と知れない。けれどどうしても。私は眞實を語るより仕方ない。私は二学期を終るとすぐに歸省した。そして先生の宅をお訪ねした。「こゝは三笠山の山燒の一番いい見物場所だ」とよく先生がいつておられた。窓には晝の日とさ、ぬのに白いカーテンが下りてゐた。私は正倉院の防火装置用の地端を歩いて博物館の方へ出ていった。それからいつか昨年、中田と一緒にきて、先生に戒壇院へつれていつてもらった日の事を思ひ出してゐた。有名な戒壇院はなかに、普通で入れてくれぬのだが、先生の御案内のために見る事ができたのだ。古風な鍵の音を私は一緒に嬉んだりした。「杉野もくる筈だったが」と先生は境内へゆくまへに東大寺の南大門の附近で二三十分も杉野の来るのを待つてゐられた。それでどうしよう杉野は来なかつた。それから先生自ら坊さんを呼びにゆかれて例の鍵の音がこもつた五月の松林の中に響くのときいたのだ。キキと四方の扉の開く音、やがて闇中の四天王が照明されてゆく旅に片方づつから光をうけて、つひに全像が光線の中にさらされた。先生は「竹頭木屑」といふ「炫火」十一號の文章の中で先生の古代藝術へ、むしろ汎古代的なものへの享受を書いてゐられる。あの断片の中に先生の美術史への態度がある様に思つた。先生は藝術を通じて知識を語る藝術史家であるよりも既に以前に藝術を専ら素直に享受してゆかれる藝術家なのだ。藝術する直観は知識を語ることをひそかにいつか笑ふ。先生はよく「生徒をつれて古代美術の導きをするだけだ」といつてゐられた。勿論それは美しい人格の謙譲に過ぎぬとしても、一面先生の美術史の方法、否、藝術享受の方

法、一種の美しい古代への浪漫主義であらう。私共の様にあんなにも豊饒な古代と古代藝術の育くまれた土地に生れたものにとつて、例へどそれらの観念を新しい入々の見方で否定しようとしても、先生の考へられる氣持はいつもじみじみと今の私の心持の底に残るのだ。私は三月も行かずに奈良へ歸つてくる久しぶりといふ感さみどく感じた。白鳳推古などの彫刻をみると、つと欽然とした生命力が自分の中に浮び起るのを感じた。それは「これで仕事が出来るといふ意志の力づけるやうな氣持を與へられるのだ。私は先生が恍惚と古寺の囀圓氣の中に、古代藝術の氣分の中に、専ら氣分と囀圓氣を享受されるのを一つに完成された境地の様に思つた。私はまだまだ人を、まして師を語る柄ではない。しかしこゝをにして自分を語ることに以外にどうも深い追想があらう。その時先生は私等にあの四つの立像中どれが一番いゝとらうと語られた。私は言下に廣目天をさしたのだ。これは先生の同感を得たらしい。私はそれを鎌倉のものと比較してみた。私はたゞ藝術の様式史として歴史的に比較したのだ。私はどういふことを先生の境地では殆んど絶望的に否定として解答を好まぬだらうとは思つてゐた。久しくして戒壇院を出てから私は正倉院の前を散歩した。その芝生の上で先生は先生と生徒といふ関係よりもつと親しい同好者と云つた氣持で古代藝術の享受と私らへの啓蒙を語られた。



いろいろのわけから私などは最も親しく先生の教をまき、さらに個人的の世話にさえなつてゐる一人であらう。大体古美術といつて標榜のものの中へ疎たけでもつき込んでゐたお蔭かも知れない、その他短歌會のことであらうにしろ、又史學研究會のことにしても一方ならず先生のお世話になつた。「焔火」と先生との事は少しつゝ古い校友會誌の方へ書いておいた通りである。「大高短歌會」とか云ふものがあつた頃から先生が顧問と云つた様子を所にゐられたそうだが、私が「焔火」を出す様になり、さらに校友會費から補助をもらひだしてから一層いろ／＼と御迷惑をかけた様と思ふ。巻初扉にかゝけた遺詠は「焔火」の割刊号と二号に先生からいたゞいたものの中である。

山添ひの桃咲く小村練桃咲く藪かけの家に吾は生れし

といふ歌がその中にある。これは全く美しい歌である。殊に春の初め築師寺辺を巡禮した人はきつと氣づくであらう。大和のあのわたりは土の色が赤埴を交へてそれがえといはれず美しい上に、それと配色する常緑樹の漆緑の中にたわ／＼と咲く桃の花は全く情緒的に美しい風物をなす。京都は秋の都だ。奈良は春の都だ。天平は春の匂ひだと先生はいはれた。私はその天平の春の匂をこゝに感じた。一見平凡な歌風であるが大和の殊に南和の春の風物——先生の生家は小泉の方だときいた——を知る人にとつては絶唱だと考へるであらう。「吾は生れし」と疊みかける句調はさらに和やかな中に鋭い抑力を持つ様と思はれるのである。「アンゼラス」の歌にしても、或ひは後の二つにしてもそして遙かに私は先生の古美

術享受の境地と美しいものを味みのであつて、それは又

世にすねて山に一月寺ごもりある夜ひそかに創ぬきてみる

の姿にさへも一味の似合はしい世界を味はゞざるを得ない。私はかつて先生から昔先生が「帝國文學」の寄稿家であつた事實を聞いた。醍醐寺へ行つた歸りの車中であつたかと思ふ。この歌を讀みながらむかし先生をどらへた藝術の時代相を先生の究學の方法に合致させようとしたのであつた。よく先生は同じ寺へ何べんも生徒をひきいて行かれた。何べんも何べんも同じ作品の前に氣分の中の自分をいたまつた。たゞたゞなる、さういふ藝術に対するテイレツタンナスム的傾向は私等さへ味到し得るのだ。一度や二度見て通つただけですまされない。藝術としてよりも一つの氣分構造の素材として作品の前に現はれる先生の氣分はすでにそれについて語り得ぬ道に深化してゐた。私らはそんな氣分を好ましいと考へつゝ、やはり黙してゐるべきやうな年少の紅血を以つ。ところが先生はそんな私らを決して憎むことをされなかつた。しかし先生のさうした觀賞態度は「南都の西京」の城を美しい文章を書いてゆかれる態度だ。奈良にはたくさんの白檮佛教美術研究家がある。刻明に論文をまがしたり、寺の形の儀軌との異動を末梢的に比較したりしてゐる。歴史的にさういふことを体系づけることは形式史研究上必要であらう。しかし美術史の仕事はもう標式史だけでは満足できない。先生は藝術を藝術として愛された。藝術を知識として語ることは他人の考へる程困難な仕事でない。藝術を基礎として語ることはより困難な仕事で



ある。藝術を藝術として語りつゝ歴史として説くことは更に困難を仕事である。先生は藝術を藝術として愛された。私は何よりそれを学ばねばならぬ。それは古代の作品の研究に於ては實に学ばねばならぬ仕事である。そして先生は「一層勉強しよう」としてゐる。といふことをいつてゐられた。私は先生が西村眞次氏の日本文化史概説を「文化概説かもしれないが文化史の概説とはいへない」といふ意味で批判されたのを讀んだ。同様のことを骨董趣味の日本の群衆の美術史家にも考へられたであらうと思ふ。少し後に私が先生に話してゐるとき、美術史と藝術製作の觀念から先づ史的區別を考へてゆく必要があるでせう。と云ふと、藝術の觀念の变化からいくのだねといふ事を云はれ、新しいことを知っておく方がいい、と語られた。先生が財津先生の追憶文（校友会誌最近刊）の中で財津先生の俳句のことを書いてゐられた。先生からもらったばかりや手紙にはきつと俳句が一つ二つ書いてあったのだが、今手許にもつてゐないし、全く忘れてしまった。

### 三

最後にあつたのは昭和六年の夏休で、七月の上旬だったと思ふ。その日は中田がやはり一緒に行くと言つてきた。雨が降つてゐたが僕等が夕方からお邪魔した。それであふとまつさまに先生が私にむかつて四月には失礼したといふ積なことをおつしやつた。四月上旬すう前に一度一緒に博物館をみようといふお手紙を受けたからい憎その日先生は急に法隆

寺の聖徳太子年忌祭に出席されて、そのお断りのほか私が私へと、かなくて私一人が博物館へ行つてしまつたからだつた。私はそんことをいつか思ひ出した。すると私はその少しまへ先生から東大文科には歴史が試験科目にあるといふので詳細な注意書を私の方からお頼みさへせぬのにならざる下つた事を思ひ出した。その中にもやはり俳句が、ゐたのだつたが、今は今正確に覚えてゐない。私は奈良公園の雨の中を散歩してきた話をしたりした。中田はわざ／＼大阪から京都へ廻つてきたのだつた。先生へ行かうといふ様なことを語られたが夏はためだ。この頃休が大へん弱つたからといつておられた。そのうち先生は私が以前に校友会の雑誌へ書いた論文のことを話し初められた。私は冷汗を感じつゝ、やはり大体会のまゝの主張をした。私は白鳳と天平を比較してみると、天平は次第に進歩的要素がなくなり類型してゆくのでないでせうかといふ様なことを語つた。いつの間にか私の言葉が乱暴になつて熱していつたが先生はよく聞いてゐて下さつた。上代藝術の制作は理念的には白鳳で完成してゐるが、天平がそれを動かから靜に移さうとした。それはある意味で進歩的要素がなくなつたが作品技巧の完成といへる。しかし理念の完成は済んでゐるといふ様なことを技巧とか作品の精神にわたつて例証しながら上気して語つた様に思ふ。これは中田がゐるから知つてゐるだらうが、ところが帰つてからの話だが、僕は丁寧なお手紙をもらつた。まるで一度帰る迄に來い。又話をしようと言つてゐた。やはりその日上代作品中で何が一番好きだといふ話が出たりした。私はいつもかういはれると



法興寺の虚空藏をあげることに始めてゐた。又實際一巻うちこんでゐた。やはりそういふと先生に笑はれてしまつた。先生も私の宣傳ぶりを知つておられたから。先生は地獄谷の石佛の大へんよい拓本をもつてゐられた。初めて見たのが徳意堂の講義の時だつた。その時分私は上代藝術史の歴史的の見方から石像磨崖佛の形式が一つの時代の意義をもつものではなからうかといふ暗示をもつてゐた。これはむしろ進佛天上よりも佛教天上の課題に属するかも知れない。このことは先生にはつきり聞く機会をどうも持たなかつた。けれど先生がその後の歴史の講義中で地獄谷の石佛のことなど説かれてゐると人にきいたのでいっか直接にそのことについて聞いておかうと思つてゐたのだつた。しかし機会を失つたものの、私はそれを光栄と感じた。去年昭和六年先生のところへいったのは七月の上旬でその後九月になつて私は磯城郡の平垣地のある寺で一つの古い佛像を見た。さうといふよりも未全く人に知られてゐない作品だからぜひ先生を御案内しようと思つたのでつた。その次の日に私は上京してしまつた。その作品は古い十一面観音の形式で、下部の方がいちじるしく損傷してゐるが、ちよつと見たところでは少くとも真観か。それ以前のものと様に見えた。しかしその後まだ再度訪ふ機会をもてぬからこの考證には確實性が無い。故に寺名も記さぬが、先生に見せる機会を失したは遺憾にたえない。

四

こんな仔細なことを記してゐると、私は他人に見える様に高等学校三年間の学業放棄の好意的なくらしを全部書く必要があるかも知れない。しかし私は、一統にそれを好意のみ思はず、観音寺と甘無備寺へ行つたことと一度云つたことがあつた。甘無備寺の方は偶然中田と二人で一昨年五月に海住寺、神童寺、蟹満寺、一休寺へいったときに見てきたものであつた。さうして強行軍は出来ないといふ様を先生のお話だつた。私はその頃大和の櫻井から毎日通学してゐたので、櫻井へ行く方の電車は遅がよいか、奈良の方はあらくて困る」といふ話を話さなくされた。先日の日にも私はそれをまっさきに思ひ出した。私は以前に「燈火」へ「海住山寺」といふ連作や「方尊寺など」といふ似よつた性質の歌をのせたことがあつた。最近そんことを考へたりした。どうした時私は新しい息吹で私の中に存在してゐる古代への熱情を感得した。やはり先生の賛方と三十年の時遠の差で似つかはしいもの、味に思ふのである。先生は始め大学で西洋史をやられたさうだつた。大和へ歸つてからいつか日本の古代文化の研究にまきづりこまれてしまつたと嘆息されたことがあつた。それで隠然として天竺の佛教美術、文化の権威と云はれつゝラヂオの子供の時間に面白い形容詞まじりの話をされるだけの様で、とつと有難い重心をもつてゐられたんぞ。今でも私らの友達は先生が雑誌にかゝれた佛さまの繪のことを何と云へぬ好ましさで思ひ出すさうだ。これから五年しても十年してもさうだらうと思ふ。さう筆をとめよう。いくらでも思ひ出して書いてゐて、いげんのあることではない。「燈火」



編輯者の好意で、先生のことを書く機会を與へられたことは本當にうれしい。こゝろした個人  
人的な思ひ出を書く様な機會は二度ともたぬかと知れない。せめて今は赤い丘の早咲の梅  
の様な気分を先生のどして私にさるすべしとへと遠慮して綿々とした筆を遣ふだけであ  
る。

この記 昭和七年正月三十日 東京西郊上沼の寓居で

吉先生の近業その他

吉先生の近業その他

佐々木青葉村先生哀悼句四章

田中克巳

枯れ原に鳥落り時雨降りいでて

一抹の雲のこりつ、ゆうぐるる。

こもりぬじ病雁おつる沼ちかし、

うらみ火に騎助坐像を仰ぎぬて。

齋藤茂吉先生の近業その他

嶺丘 耿太郎

覚悟していでたつ兵をとぎのまま理ゆゑに人を騒がせ (改造新年号)

支那との戦争のいろいろな副産物の一つとしてわれわれはこの歌をとりあげやう。われわれは頓屈な術語でこの戦争を論ずるいろんなものを見た。しかしわれわれの階級を代表する議論はこの歌と、もう一つ後でとりあげる北原白秋先生の態度とによつて代表される。と考へる。われわれの階級なる語を僕は今用ひた。この言葉の意味は甚だ不正確である。元よりわれわれは現代にあつて凡ての生産機関を独占し傲然と支那に向つて挑戦するかの階級には屈しない、しかも又新しく興りつゝある (現在は凡ゆるみじめさを享受し、未來には凡ゆる輝 約束されてゐる) 階級にもわれわれは屈すると云ひ得ない。かゝる中ぶらりの状態にあるのがわれわれである。之を階級といふのはあやまりであらう。現にわれわれの中の幾らかはも早客観的にはプロレタリアートの生活に落ちこんで了ひ、残るものとても刻々と没落の途をたどりつゝある。しかも尚われわれが無意識的にすらわれわれの階級を云々するのは何故であらうか。われわれは自分らの教養、自分らの今迄の文化への貢



敵を高く買つてゐるか故である。然し乍らわれれば一度として階級として存在したことがよいことは認めねばならぬ。われわれは嘗てブルジョア社會の文化的建設に力をつくした。これ故われわれはとすればブルジョア階級の一員として自らを見做し、われわれの教養、われわれの精神を誇つたのも一應道理の如く見えやう。しかしわれわれの教養、精神のものが決してわれわれ自身のためのものでなかつたことは、現在以前にも増して教養の高さを誇るとも最早何等の厚遇を以て支配階級に迎えられることを以て知り得る。われわれの支配階級に於ける利用價值はも早くつくりに消失して了つた。雇傭契約は期限が切れて了つた。しかもわれわれの大多数は未だに昔の残滓を捨て切れぬ。破産に類し路頭に迷はうとする時われわれは体面を、名譽を尚呼号する。体面とは何であるか名譽とは何であるか、われわれはナホレオンに非ずしてナホレオンの唾を口に持つてゐるのである。高藤茂吉先生はわれわれの仲間である。医学博士の学位に於てこの人はわれわれ仲間では教養の高さを極めてゐる（青山脳病院長の彼は何の位置にあるかを知らない）まことにこの人はかつて短歌に於けるブルジョアレアリズムの闘士として巨きな足跡をのこしたが故にわれわれが現在有する文化の建設者の一人である。さうして今日のあたり彼の建設した文化の一角が支配階級そのものによつて崩されて行く時、彼に向の態度を以て之に當らうとするか。ブルジョア文化の尺度を以てすれば、戦争は文化の破壊である。満洲に於ける支那との戦争により幾千の木犀咲く家が破壊されたか。戦争は道徳の破壊である。幾千

の朝鮮人、幾万の支那人が銃口をつきつけられ、職を天日にさらし、幾百の日本女が戦地慰問に（冗談ぢやない）出稼ぎするか。戦争は浪費である。戦争は……。茂吉先生はこれらの尺度を以て戦争を批判して来、今度の戦争をも批判したのであらう。就中茂吉先生の傷心に値するは戦争に依つて失はれる兵士の生命である。茂吉先生の生命好きは人々よく知るところである。（誰が生きてゐる事の嫌ひな奴があり得るか）唯の生命を思ひ、當て殺すだにその生命を惜しむ人である。

萱草とかなしと見つる眼にいまは雨にぬれてゆく兵隊が見ゆかゝる歌を作つた人である。

戦は上海に起りおたりけり厚仙花紅くちりみたりけり。かゝる歌も作つた人である。しかし後の歌に見ゆる茂吉先生のブルジョア的なニヒルも前掲の歌にはし早や消え去つてゐる。茂吉先生はそのニヒルの代りに何を以て来たか、「覚悟して」の句を見よ。覚悟したのは兵隊でなく茂吉先生だったのである。われわれは幸か不幸か兵隊の覚悟といふものを茂吉先生程たやすく信じ得ない。われわれはその上兵隊の覚悟に關係した色々な情報を向いてゐるのである。われわれは出征する兵士が列車で通過するのを見てゐる。駅頭の見送りの萬歳の声とも聞いてゐる。かゝる時われわれは兵隊よりも先に覚悟して了ふのが常である。人間の覚悟をなすものがせんばに幾万人もの胸に一度にた易く出来得るものであらうか。この覚悟といふ語は吟味の必要がある。



茂吉先生は覚悟の必要な人間の未だ外に多くあるのを忘れてゐる。先生の政郷東北地方の人民もやはり覚悟して娘を賣り飢饉に耐えなければならぬことを、勿論支那人、殊にその兵隊に出される階級の入達の覚悟については一言も云はないのである。そして「理ゆえに人は騒ぐぞ」の句に至つて遂に茂吉先生の覚悟は完成され、戦争ははじめられるのである。

しかしわれわれは茂吉先生に対してはその古典的な東洋趣味のためにまだ我慢が出来るといふものである(ダマサレルナ)が北原白秋先生と来れば凡そ我慢がならぬのである。先生は新年の朝日新聞に於てかつて満洲旅行中の支那人の暴慢を憤り、生命に危害を加へられんとした怨恨を語りそのため軍歌でも何でも作ると云ふのである。試みに想像して見よう。忠勇無双の我が兵が白秋先生作の軍歌を歌ひつゝ、行進して行く様を、われわれはこゝで涙が出るのである。白秋先生のゲイ術に對してか、バカ云へ。支那人の逞は白秋先生様の自動車にも乗らないのに生命に危険を感じたり、いふ人な目にあふのである。白秋先生は銀座裏の刀フエを借切りにして(何処かに書いてあつたぞ)或はその古典的な礼義觀念から明窓淨几の下に更に士氣を鼓舞するために盛んに軍歌をつくり、その結果我輩は軍歌の文句通り四百余州なんが皆とつて了ふことだらう。

併し両先生はともかくわれわれ全体の態度の代表者なのである。かゝる時勢にあつては家でおこるんでるか或は東京駅まで出かけて行つて兵隊さんの肩をたたくてしつかりやれ

とでも云ふより外仕方がよいのである。

これはわれわれの様に生命を愛したり本棚に書籍を並べて持つてゐたり駿人を一人二人有つてゐるもの、覚悟すべき理りなのである。われわれがかゝる余裕すらなくなればわれわれは或はもつと偉くやつて街頭にゴミ酒を洒つたりその他いろいろなることをするであらう。意思とか思想とかいふものは環境そのものだからである。齋藤茂吉先生は青山脳病院長であり北原白秋先生は詩聖であることを忘れておかう。

(僕にはこの二人の老不家とその歌とを心から敬し愛してゐるのである。それ故か、る文章を卑するは甚だ心外であるが、かゝる脚時世ゆゑ余儀なく動轉してゐるふのである) 先刻僕が茂吉先生を見做して短歌に於けるブルジョアリズムの建設者とした。この見方は畏友湯原冬美に依るものである。併し僕としては冬美以上に茂吉先生に圧搾されたロマンテイシズムの結晶を見る。元より茂吉先生はその修養上、環境上リアルな要素を多分に詰めこまれたため本来のロマンテイシズムは昇華されたと思ふべきであるが之は彼の不幸であり幸せであると思ふ。例へば茂吉先生が今度の戦争を「張学良の軍樂鳴りき」と浪漫化する時、彼のロマンテイシズムは他の人に於けるより現実的であり頓屈であり、そのためわれわれは彼の苦悶をうかがひ知ることが出来る。茂吉先生のレアレスティックな教育はこのリアルを看過し得ない。しかも彼の生來性は青く光く背片を超え張学良の軍樂にまで飛躍する。これをかの三上、直木輩と比較して見る時、茂吉先生のロマンテイン



ズムは一應理性を以て分析されたる美しさを示す。これはかの白秋先生の態度と比較して  
も微される。併し乍らそれ故茂吉先生がわれわれを偽瞞する罪は或はより高くなるもので  
あらう。これは彼の不幸である。かつてわれわれに

わが母の吾を生ましけむうらわかきかなしき力思はざらめや

の歌を示した時茂吉先生はわかく揮けるひとであつた。そこには白秋先生の如き心境の誇  
張もなく感嘆の誇示もなかつた。その茂吉先生が性慾の衰へを嘆じたのは二三年前のこと  
であらうか。そして今は淡菊をうたひ故友をおもひ「古の心足らへる人のこと餅を食」つ  
て昭和七年を迎へた。

今戦争は上海にもひろがり英米兩國の干渉も最早眞剣味を帯びて來た。露西亞も敵討行  
動を取つてゐると報せられる。米國の艦隊は一年分の兵糧彈藥を積んで西太平洋に出動す  
る。

茂吉先生のロマンティズムがレアルの軛きを捨て、軍歌でも作ることにならなければ  
先生百年の後われわれは哀歌を作つて棺を蔽ふであらう。(一九三三、一)

附言一、茂吉先生をニヒリストと誰が云ひ出したのだらう。中野重治であつたかも知れ  
ぬ。けれど嚴密な意味から云へば茂吉先生は決してニヒリストでない。例へば「理ゆ  
ゑに」等と云ふ語に東洋的な虚無思想(ことあげせぬとはこの思想であらうか)を認  
めるとすれば大間違ひで彼はレアリストライツクなロマンティストである。それ故われ

われは彼のレアルへの認識を問題とする必要が急である。彼は理ゆゑにの一句に於てレア  
ルの見方を局限されてゐる。われわれ新しきロマンティストの標題は常に事實の正しい把  
握とそのロマンティスムにあった。茂吉先生はわれわれの標題の前半を如何にしても認  
めることが出来ぬのである。茂吉先生は自己の脳髓内に行はれる抽象作用に余りに頼りす  
がる。彼は古い型の帽子を着てゐる。茂吉先生は他の彼と同輩の人の多くと同じく觀念  
論的に見た世界にわれわれをも移植する。こゝに満ち足りぬものが出て來るのは当然であ  
る。それは彼のレアレスティックな教養のたりに。その特徴はわれわれを觀念論的なものと  
決定して予ふ。色眼鏡はしばしば外界の事物の色彩を誤らせる。茂吉先生の理ゆゑに人な  
らざるといふのは複雑のことばである。(一九三三、二)